

## 資料Ⅰ 特別養護老人ホーム・老人保健施設サービス評価事業 5年間の総括

### (個別項目ごとに評価された事例)

#### 高いサービスの質が認められると評価された個別項目ごとの内容

##### Ⅰ 日常生活援助サービス

###### ① 食事

- ・利用者が手作りした観葉植物を飾り、食事前からBGMを流すなど、楽しく食事できる雰囲気づくりを行っている。
- ・選択食は、メニューの幅を広げたバイキング方式を導入するなど、利用者の希望に応える工夫が見られる。
- ・食事介助は、食べこぼし防止のためのエプロンを利用している施設があり、介助食器にも工夫が見られる。
- ・食事介助のペースは、フリータイム制を導入し、ゆっくり食べられるように配慮されている。残存能力の維持・向上を図る為にも自立を目標にがんばって欲しい。

###### ② 入浴

- ・各施設では、利用者の身体状況に合わせた入浴方法を取っており、希望入浴を毎日実施している施設や夜間入浴を実施している施設も見られる。
- ・プライバシーの配慮については、脱衣所やカーテンを設置して利用者本位の工夫が見られる。
- ・タオルの準備は各施設で努力しており、個人の名前を入れたタオルや個人用の洗体スポンジ、一人で何枚も使えるサービス、感染防止の為の薬液による消毒済みタオルを使用している施設もある。

###### ③ 排泄

- ・調査検討委員会を設置して、処遇向上を図っている施設やポータブル専用のスカートを作成してプライバシーを保持している施設がある。
- ・おむつ交換は、利用者の皮膚の状況に合わせた交換を随時行っている施設もあり、利用者の快適な生活への配慮が見られる。

###### ④ 寝たきり防止

- ・各施設で寝たきり防止や自立を促す努力が見られる。食事の時は、車椅子から全員移動させている施設や体位変換表を設置している施設も見られる。
- ・普段着への着替えは、毎日の生活にリズムを与え、自立支援にもつながるので、各施設で実践してもらいたい。
- ・片麻痺でも自力で移動できるように車椅子を改良している施設もある。多くの施設で工夫して実施してもらいたい。

###### ⑤ 外出や外泊への援助

- ・外出日を設け、家族との旅行やドライブ、ショッピング、外泊強化月間を設けるなど様々な工夫が見られる。

#### ⑥会話

- ・禁句集やマニュアルを作成し、職員に周知徹底を図っている。会議や研修会を行っている施設もある。利用者に対する言葉づかいや言葉がけに十分な配慮が見られる。

#### ⑧レクリエーション

- ・風船バレーボールを行っている施設が多く見られる。ボランティアの活用などで、レクリエーションの開発も検討する必要がある。
- ・クラブ活動も利用者の積極的な参加を促す必要がある。

#### ⑨痴呆性老人（認知症高齢者）

- ・個人ごとの一日の行動パターンを円グラフにし、介護プログラムを作成している施設、居室にのれんや利用者の思い出の物を掲げて自分の部屋を認識してもらうように工夫している施設もある。

#### ⑩利用者の自由選択

- ・手づくりのれんを下げたお酒を楽しんでもらい、利用者の希望したメニューを「喫茶コーナー」で提供するなど、利用者の自由選択の機会を確保している。

## 2 専門サービス

### ①看護・介護

- ・誕生日を「現状お知らせの日」とし、利用者の生活状況や健康状態を家族に説明している施設があった。「ホームだより」「家族だより」を利用して定期的に利用状況を説明するよう心がけてもらいたい。
- ・緊急事故時の対応や感染症対策については、マニュアルを作成し研究会を設けるなどが必要である。
- ・褥瘡予防委員会を設置して、定期的な体位変換など、個別に実践している。

### ②リハビリテーション

- ・個別のプログラム作成が各施設とも課題である。短期的、長期的目標を策定し、利用者の自主性をくんで、職員一体となってプログラムを実践してもらいたい。
- ・実際の生活場面で役に立つような訓練・指導が必要である。理学療法士、作業療法士を確保し定期的に実践する努力が必要である。

### ③社会サービス

- ・施設内で利用者による自治会を開催し、入所者が決定することを実践している施設も見られる。今後は、利用者が相談やトラブルなど何でも言える機会を確保してもらいたい。
- ・家族への情報提供は、各施設で様々な工夫が見られる。誕生日に家族のメッセージを送ってもらう施設や家族会を設置して利用者とは触れ合う機会を設けている施設も見られる。

## 3 その他のサービス

### ①入退所に関する項目

- ・パンフレットを作成して施設見学を実施。365日体験入所を行っている施設もある。

### ②在宅支援

- ・各施設でショートステイやデイサービスを実施している。配食サービス、安否確認、情報交換、ヘル

パー派遣事業、ナイトケアなどを行っている施設もある。多くの施設で参考にしてもらいたい。

#### 4 地域連携

##### ①協力医療機関

・医療機関との連携に努めており、夜間や休日、祝祭日も対応している。深夜、早朝の往診なども行われている。

##### ②地域福祉

・ボランティアや実習生の受け入れは各施設で積極的に行われている。また、夏休みに高校生を体験入所させ、登録名簿やマニュアルを整備している施設もある。今後も、地域に開かれた施設を目指して更なる努力をしてもらいたい。

##### ③広報活動

・広報委員会を設置し定期的に機関誌を発行している施設が多く見られる。また、「家族だより」を定期的に発行している施設もある。施設の一日を紹介するビデオを制作している施設もあった。今後は、広報などの発行回数や内容に一層の工夫をお願いしたい。

#### 5 施設整備

##### ①施設整備

・利用者が過ごしやすい快適な生活空間、家庭的で和やかな雰囲気づくりを検討してもらいたい。

##### ②施設内環境衛生

・各施設では環境衛生に努めている。異臭防止に備長炭をベッドの下に置いている施設もあった。

#### 6 運営管理

##### ①職員への教育・研修

・職員研修を実施している。「一人一研究」や職種ごとに自主研究発表を行っている施設もあった。今後は、評価の低かった動作介護技術訓練や新入職員プログラムの充実に努めて欲しい。

##### ②記録・調査

・記録の記入・調査は評価が低く、各施設共通の課題である。嗜好調査のアンケートを実施して利用者の意向をくみ取ったメニュー作成をお願いしたい。

##### ③プライバシー

・プライバシーの保護は入所者処遇の基本である。各施設には十分に理解をしてもらいたい。また、職員は利用者情報の流出防止にも心がけてもらいたい。

##### ④処遇計画など

・この項目は、各施設共通して評価が低かった。利用者の立場になった処遇計画を作成し実践してもらいたい。

##### ⑤事故発生時の対応

・各施設では、各種訓練を定期的に行っている。緊急マニュアルを整備している施設もある。不測の事故に備えた「危機管理マニュアル」を作成している施設も見られる。

## 資料 2 M 町特別養護老人ホーム「C」視察の感想

2002(平成 14)年 5 月 30 日に行われた民生児童委員による近隣の特別養護老人ホームを視察した際の感想文を取り寄せまとめたものである。

M 町特養「C」視察の感想(平成 14 年 5 月 30 日)

### (施設について)

- ・町の担当者が各方面から検討し、入居者の方が一番心地よい様に検討してあると思いますが、C 苑の場合、各室規格化され食堂も大ホールでいかにも病院のような感じがして我が家という気分にはなれないような気がした。
- ・バスで C 苑に上っていきながら良い眺望で環境もすばらしいところだなと思ひ苑内を見学して感じたことは、街から離れて山の上にあるので入所している人が、疎外感を感じるのではないかと心配になりました。富谷町の杜の風は近くに小学校があり子ども達の声が聞こえ活気を感じます。
- ・車いすが 2 台すれ違っても良いように(廊下幅を)広くゆったりとしたスペースなそうですが、なんとなくガラとした様でした。
- ・健常者の別荘地にふさわしいような環境ですばらしい施設だといえる。欲を言えば、特養は人里に近い方が望ましいのではないかと、一人沈みがちなお年寄りを元気づける為にも、大勢の人たちが訪れやすい交通の利便性なども考慮すべきと考える。同年に開設した富谷町の杜の風と M 町の C 苑との面会者数を比較してみると、C 苑が 1,892 人に対して杜の風は 3,272 人で 1.7 倍多い。
- ・全体的に見た場合、他施設に比べ非常に広い空間が目立ち明るく感じましたが、例えば、廊下、食堂などを見ても広い空間があり過ぎるためか、入居者同士のふれあいにも間隔があり過ぎるように思えました。狭くても触れ合いのできる空間があれば、それが触れ合いの震源地となって広がっていくように感じました。
- ・開放感と廊下も広く全体的に明るいな一と思ひました。障子による間仕切りは、何かあったとき直ぐに声がけ出来るようにとの配慮だと伺ひました。一理はあると思ひますが、長期となった場合、完全個室の方がプライバシーは守れると思ひました。
- ・大変広々として、一カ所にまとまった老人施設があるのは横の連絡も取れ、働く方々にとっては大変都合がよいと思ひます。しかし、個人の部屋がホテルのように一人ひとりドアの向こうで暮らしているのは、老人にとってますます孤独になってしまいそうです。
- ・入った第一印象は、明るく広々とした感じだった。特に廊下の広さや天井の明かり取りは快適な状態で過ごせるという感じがした。障子での間仕切りも明るさを感じた。ただ、人によっては、障子一枚の隔たりでは気兼ねもあるかなって思ひた。
- ・杜の風に入ってほっとする感覚があった。今回の視察でその理由がわかった。杜の風には、昔使った生活用具等が所々に置いてありとても安らぎのある生活がある。また、地域の皆さんと気軽にお付き合いできるということも大変結構なことだと思ひている。

(入居者の様子について)

- ・これからも強く生きるんだという覇気が感じられない。
- ・数人に施設での生活の様子を聞いてみたところ、「ここでは何もすることがない」といった生活や将来の不安だけを聞かされた。精神的な面で、私たちはどのような支援が出来るのか考えさせられるものがあった。
- ・食卓についている人たちに会話がなく、楽しそうな雰囲気がないのが気になった。
- ・皆さん、色々な事情で家族と暮らしたいのを我慢して入居していらっしゃると思います。身寄りのないおばあちゃんとお話しをしましたが、みんなとおしゃべりをしたいという思いが切々と伝わってきました。自分のこととお話ししながら、施設に入って暮らせる幸せと自分の思いのまま行動できない歯がゆさをちょっとのぞかせていました。
- ・高台の山の中にある大きな建物が孤立している所では、街の様子も元気な人々の活気ある生活の様子も子どもあちの笑い声も聞こえず、毎日同じパターンで過ごしているように感じた。
- ・静かで、対話が少ない様子が気になった。手持ちぶさたな様子で、動きが少ない。
- ・広い食堂のその空間が寂しく覚えた。
- ・個室の入り口のガラス窓の目張りは何を意味するのだろうか。当町の杜の風、保健福祉課の目指した町内会的取り組みは、中には異論を唱える人もあるのかもしれないが、優れた発想で今の福祉に求められている原点だといえる。
- ・特段の不便さはないようだが近隣の住民との交流が少なく若干退屈気味の様子だった。
- ・地域との関わりが少ないせいか、一日何もすることがなくつまらないという方がいました。少し刺激が欲しい様子でした。
- ・狭くとも同居者同士・職員・外来者などみんなが通りがかりにでも声かけやふれあいの出来る近い感触が、いきいきとした暮らしぶりを発生させるのではないかと思う。杜の風の特徴である、地域の中での一家屋、一家族での生活感ある暮らしが出来る将来性のある高齢者への夢のある場所であって欲しい。杜の風のユニット制の特徴はこうであって欲しいと強く感じた。
- ・杜の風は、前を見れば田んぼがあり学校も見える。裏山には四季折々の花が咲き、良いところに建っていると思った。
- ・昼食時、食堂に集まった入居者にお話し合いは少なく静かだった。互いの心は閉ざされているのだろうか？

## 資料3 民生委員児童委員協議会機関誌『民児協みやぎ』掲載文章

使命に燃えて!「杜の風」の取り組み

富谷町通信員 工藤洋子

富谷町民児協 43 名は、仙台市に隣接する緑豊かな人口4万人の町でそれぞれの担当地域で、住民とのパイプ役として一人一人の幸せを願い地道に活動をしてきた。そんな折、平成13年6月、富谷町に全室個室のユニット型と呼ばれる「特別養護老人ホーム・杜の風」が開所した。私たちはこの「杜の風」の中での役割を意識し、開所前から数多くの勉強会を開き役割を模索してきた。「杜の風」の6つのユニットに、民生委員6~10名がグループを編成しユニットの支援にあたった。支援に先がけて、入居者・町職員・施設職員と私たち民生児童委員との共通の理解のために情報交換会を重ねた。最初はなかなか道筋が見えず空回り状態が続いた。ユニットを訪問しても施設の考え方に、ずれを感じ疑問をいただいた。何のためにここに来ているのだろうと思うのも度々であった。しかし、毎月の定例会でグループ毎に「ユニットでの民生児童委員としての役割とはなんぞや」「利用者は何を私たちに求めているのだろうか」「地域と利用者の接点はどうすればよいのか」とさまざまな検討会を重ねる中で「自分の親に喜んでもらえる施設」との富谷町の方針が深く理解できる様になり、使命感も定まった。そうになると、後は速い、行動のみである。交通安全週間には、お年寄りと一緒に朝に学校の前に立ち子ども達への声かけ運動をして喜ばれ、クリスマス会や夏まつり等諸行事への手伝いも楽しくなった。先日は開所3周年のお祝会が持たれ、私の担当ユニットでは手巻き寿司をふるまった。まぐろや納豆などを入れてお年寄りに手渡すと「もう一本」と人差し指を立てておかわりする姿に、こちらも張り切って巻いて手渡す…。そんなひとときに充実感と使命感を感じながら帰途についた。今後は、地域の方々に自然に杜の風に足を運んでもらえる様、施設と地域のパイプ役にもなって行きたい。この町での自分の使命は何か、全ての委員が喜々としてそんな思いで活動している。それが現在の仲の良い生き生きとした富谷町の民生児童委員のメンバーなのである。

出典：工藤洋子，2005，「使命に燃えて!「杜の風」の取り組み」『県民児協みやぎ』宮城県民生員児童委員協議会，vol.63:4.

## 資料 4 民生委員児童委員の声

### (杜の風の支援の感想)

#### ○民生児童委員 A 氏

平成 16 年 12 月から民生委員に携わるようになり、「いちよう街」を担当しました。先輩民生児童委員は平成 13 年開設時から 3 年心の繋がる支援が出来ているのか、本当に必要とされているのかなど検討がなされていました。私自身は、担当のいちよう街に立ち寄ってみると雰囲気がかめめず、かえっておじやまになるかな?という時もありました。この 4 年間で、お花見、芋煮会など、杜の風のイベントの時に参加するようになり、何度か行くうちに入居者、スタッフ、親族の方々とも親しくなり、名前も覚えられるようになり、おじやますのが楽しくなりました。杜の風のボランティアは、いつでも気軽に入居者と関わり合えるように、受け持ち街を定めていますが、なかなか気軽にという所にはなっていません。イベントなどの必要がある時、必要に応じて交流していければ長くお付き合いができるのではないかと、今年から別の街へ変更になったので新たな交流をしていきたいと思っています。

#### ○民生児童委員 B 氏

ユニット型の施設が早々と富谷町にてきて 7 年が経ちました。私たち民生児童員がかかわりを持って何らかの支援が出来れば嬉しいと考え参加の協力をすることになりました。利用者の皆さんとも顔なじみになり、気軽に会話が出来るときには行事がある程度お手伝いできるのを楽しみにさえ感じるようになりました。私に関わっていたユニットに 90 歳を超える A さんがいて、いつもニコニコと戦友の歌の替え歌で「梅干しの歌」を歌います。幸せそうな笑顔を見ていると若い頃の思い出と共に歌っているようで、とても楽しそうです。全員で合唱してあげると何度も繰り返します。杜の風のユニットに関わっている職員が小さなことにも気がついて入所者のお世話をしている様子に感心させられました。これからも、自分で出来ることは自然に振る舞って、利用者さんの目線で接してあげられればと思っています。利用者一人ひとりが孤独を感じないような暖かい施設であって欲しいと思いました。

#### ○民生児童委員 C 氏

杜の風はユニットケアという家族単位の暮らしを通じて、普通の生活が出来るように配慮されています。また、全員個室でそこへ自分の家具を持ち込んで暮らしており、一人ひとりが大切にされているという明るいイメージを持ちました。我々民生児童委員は、施設にならないように、時々立ち寄らせていただき、話し相手になったり行事を共に楽しんだりできれば良いのかなと思います。家族や施設以外の人と関わりを持つことで、対人関係は広がりができ、より社会的になれるのではないのでしょうか。施設で生活を送りながらも、地域とつながっていけるよう、微力ながら地域住民としてお役に立てれば嬉しいと思っています。

### (担当住民への支援で役立ったこと)

- 地域福祉フォーラムへの参加などにより地域ボランティアの福祉活動への参考になった。
- 介護が必要になった方へ、施設サービスの内容や生活の様子について説明できる。
- 家族と同居している人ばかり見て来たが、施設入所で子ども達や孫と離れどんなにか寂しいことだろ。地域には年間を通じて様々な行事があるので是非参加して楽しんでもらいたい。
- 家族の参加が少ないように感じる。自分が健康である限り支援していきたい。
- 地域の認知症等の病気を抱えた高齢者とその方を在宅で介護しているご家族への理解に繋がっている。また、デイサービスやショートステイなどの在宅介護支援機能を持っている「杜の風」の事業の情報提供が出来るようになった。

## 資料 5 施設職員の意識変容に関する関係職員の感想

### ① T 街ユニットリーダー千葉喜代子氏の感想

転勤した頃は、施設に民生委員さんが関わりを持つことに対して理解することができず、各行事を行うたびに民生児童委員を「お客さん」の様に接していました。民生児童委員にも戸惑いがあるように思えました。そのような中で、職員間で何度も話し合いを持ち「地域との関わり」の中での民生児童委員さんとの関わりの重要性を学んでいきました。「地域の一員として」との基本理念に基づき、入居者の方々が富谷町の住人として町の活動と一緒に参加し、地域の方々にも気兼ねなく施設を訪問していただけるようなそんな施設でいる為にも民生児童委員さんの協力が不可欠だと思いました。地域に根ざした施設にする為にも、色々なことを相談しながら教えてもらい、入居者のニーズに応えながら町や地域の一員として暮らせるような工夫が求められています。自分だけではどうすることもできないことも民生児童委員さんに相談することで、地域とのパイプ役になって考えていただけたと思います。

しかし、今までの自分自身を振り返ると民生児童委員さんに対して言葉足らずであったり、理解不足であったりして民生委員さんに対して思う様に話をする事が出来ませんでした。基本理念の中の「地域の一員として」という部分だけを取り上げてみても、交通安全街頭啓発や地域福祉フォーラムなどは継続して行っている、他の部分では何の工夫も考えも自分自身では行っていませんでした。その為、民生児童委員さんには誤解を与えた面も多かったと思います。この反省も踏まえて、今後の民生児童委員さんとの関わりをより良いものにするために努力していきたいです。地域の行事や取り組みなどにも積極的に目を向け、情報を入居者の方々に提供出来るようにしていきたいです。民生児童委員さんのネットワーク力を最大限に活用させていただきながら、地域に根ざした施設作りを目指していきたいです。

### ② 生活相談員齊藤俊氏の感想

個人的には民生委員児童委員との関わりについては、かなり悩み苦慮したというのが実情だと思う。今でもそう感じる。

平成 16 年度はユニットリーダーをしていたが、「民生委員さん」との関わりは、前年度の関わりを踏襲しただけで、深く考えなかった。ユニットで企画したお花見、夏祭り、長寿を祝う会、忘年会に参加していただくだけの関わりだった。先輩職員から民生委員との関わりや意義を聞いて理解はしていたつもりだった。しかし、個人的にはユニットを運営するだけで、他の方との関わりに目を向ける余裕がなかったため、「なぜ、民生委員さんがユニットに入るのか」をユニットのスタッフ一同考えずにいた、と今にして思う。ユニットで行う行事に参加していただくことが「目的」となっていた。また、各ユニットによって「関わり」に温度差があったとも思う。案の定、民生委員の一部から、杜の風に関わる事への疑問の声が上がる。ガツンと一発殴られたような感じであり、私自身としては目が覚めた思いだった。その「関わり方」について平成 17 年 3 月頃に意見交換と取り組みの再確認を行った。それをきっかけに、リーダー達の何かが変わったように思う、もちろん私自身も含めてです。

平成 17 年度からはユニットリーダーから生活相談員にその立場を変え、ユニットリーダー達の「関わり」をサポートすることになった。「民生児童委員と施設」との関わり、無限の可能性を内包し

たこの取り組みに足が竦んだ職員は私だけだろうか。杜の風設立時の「思い」を振り返る時、更に、その巨大なハードルの前に立ち往生してしまった。私の知る限りそのモデルとなる取り組みは他に見ることがないように思う。そのことが、どう取り組んだらいいのか一層難しくしていると思う。しかし一方で、従来あるボランティアとは一味もふた味も違う取り組みができるのことは容易に想像できる。

杜の風として、現在の民生児童委員との関わりが満足いくものとは決して思っていない。むしろ後退した面もあるように感じている。しかし、諸先輩方が築き上げてきた「精神」だけは連綿と生きていると信じる。生活相談員としては、民生児童委員との窓口としての機能とユニットの後方支援の両面から「関わり」を進化・深化させていきたいと思う。

### ③ユニットリーダー菊池奈津子氏の感想

配置されたばかりのころは、民生児童委員、杜の風職員ともに戸惑いがあり、配置の意味を十分に理解しないまま、一般的なボランティアと同じ行事のお手伝い的な関わりに終始していました。各ユニットでは、民生委員との関わりを持つために行事を作り始め、その行事を介してしか民生児童委員の役割を見いだせない状態が長く続きました。なんだか意味が解らないままに杜の風に来てしまい、「町から行きなさいと言われたので来ました、何をすればいいのでしょうか?」と言われ、民生児童委員さんが来た時は、おやつづくりなど何かいつもと違うことをしなければいけないという雰囲気が漂っていました。各ユニットのリーダーは、日常的な関りが持てないまま、これまでのボランティアとは全く違う民生児童委員との関わり方に大変悩みました。

## 資料 6 春の交通安全総ぐるみ運動事業別の様子

## (1) 春の交通安全県民総ぐるみ運動推進会議

- 1 日時 平成 18 年 3 月 28 日(火) 午後 3 時 30 分から
- 2 場所 富谷町役場 3 階会議室
- 3 参加者
  - ・特養 入居者 5 人 介護職員 3 人
  - ・認知症高齢者グループホーム 入居者 1 人 介護職員 1 人
  - ・施設職員(管理者など) 3 人
- 4 会議次第
  - ・開 会
  - ・挨拶 富谷町町長
  - ・講話 「最近の黒川郡内における交通情勢」講師 大和町警察署交通課長
  - ・協議 平成 18 年春の交通安全県民総ぐるみ運動富谷町推進要領(案)について
  - ・閉 会
- 5 参加者の様子・感想 (凡例○入居者, □介護職員など)

参加者の様子や感想は、高齢者が入居するユニットの担当介護職員からの聞き取りやケア記録を基に整理したものである。入居者が発した言葉は、カギ括弧で書き表し、その他については、介護職員の言葉やケア記録を要約する方法で記述している。この表記方法は、これ以降の事業に共通である。

- 午後 2 時半を過ぎると上着を着て準備をして待っている。役場に着くと、会議が始まる前には資料に目を通していた。会議が始まると真剣な様子で話を聞いていたのだが、ビデオが始まると、顔をしかめ眠そうな表情をしていた(Iさん)。
- 昨日から会議のことは伝えていたのだが、声を掛けると、「年寄りには行かぬぞ」と言っていた。しかし出掛ける用意を始めると嬉しそうにしていた。会議中は少し飽きてしまったのか他の人と話をしながら服を触っていた(Tさん)。
- 会議中はじっと話を聞いて集中していた。帰りは落ち着かない様子で、一人早足に歩き出していた。「私歩いて帰るから」と言っていたので、車で帰りましょうと声を掛けると安心したのか車に乗り込んで帰宅した(Iさん)。
- 資料を手に、黙って講話やビデオ上映を見て聞いていた。「今年も 4 月 6 日が出動式だね」と話す。「毎年行ってきます」と、さも当然といった調子で返事があった(Kさん)。
- 午後 3 時には施設を出る準備をすませている。今年もやる気満々な様子。役場では話が聞こえにくくイライラされていたが、熱心に資料に目を向けていた。「早く子どもたちに挨拶をしたい」「今年も毎日参加するのだ」と話している(Nさん)。

## (2) 平成 18 年度春の交通安全決起会

1 日 時:平成 18 年 4 月 5 日(水)午前 10 時から

2 場 所:特養杜の風 ケアセンター

3 参加者

- ・特養 入居者 6 人 介護職員 5 人
- ・認知症高齢者グループホーム 入居者 1 人 介護職員 1 人
- ・施設職員(管理者など) 2 人

4 内 容

平成 18 年度春の交通安全運動の参加概要について入居者に説明を行うとともに、参加者の意欲喚起を目的に行われている。職員から今年度の街頭啓発の予定や注意事項の説明があり、入居者からは「雨天時はどうするのか?」や「街頭啓発の場所は去年と同じか?」などの質問があった。最後に参加者全員で、「今年も頑張りましょう!」とシュプレヒコールを上げて散会となる。

ここでは、出勤式(4月6日)及び街頭啓発期間(4月10日から~14日)の確認が行われた。またそれぞれの準備物や、当日の責任者や役割分担の確認が行われている。

その後、関わる職員間で次のような項目について確認又は協議されている。①パイプ椅子の確認、②写真・ビデオのパソコン(医務室)への保存、③各ユニットの感想を当日中に集め、けやき街へ提出、④当日参加者の把握・調整(当日の出勤時にすみやかに実施)、⑤各ユニットでは、参加者に対して、前日より夜勤者から声掛けを行う。また、しっかりと早番者に引き継ぐ。参加者に変更があれば、当日責任者に報告。参加利用者の感想を聞き記録するなどの参加者に対する誘導に関する確認、⑥防寒への配慮、⑦民生委員も参加するので失礼のないように配慮する、⑧期間中の勤務については、前日夜勤者が翌朝参加する場合は、時間外が出る。⑨期間中の配車表は後日配布する。

このような細々としたことが確認又は協議されて実施までの準備を進めている。

### (3) 富谷町出動式

1 日時 平成18年4月6日(木)午前6時30分から7時迄

2 場所 富谷町役場職員駐車場(一階ホール)

3 参加者

- ・特養 入居者7人 介護職員6人
- ・認知症高齢者グループホーム 入居者1人 介護職員1人
- ・民生委員児童委員2人
- ・施設職員(管理者など)5人

4 出動式式次第

- ・開会(6:30)
- ・挨拶
- ・交通安全宣言 黒川地区交通安全協会
- ・交通安全指導隊出動
- ・閉会(7:00)

5 当日の様子

富谷町出動式は、富谷町役場職員駐車場を予定していたが、早朝から雪が降り始めたことから急遽役場内で行われることになった。



写真7 出動式での杜の風席

参加予定者は、6時には出動式会場に向け2台の車両に分乗してとうみやの杜を出発した。移動距離は500メートル程度で数分しか要しない。しかし、乗降に多くの時間を要することから、6時前には移動の準備が始まる。

入居者の中には、「5時半に移動の準備を始めると言うから5時に起きて待っていたら、誰も来ない。早くつれてあばいん」と職員を急かしていた方がいた。また、昨日まで体調がすぐれず参加が危ぶまれた方が、朝になると防寒着をしっかりと着込み、準備万端で職員を待っている。ほとんどの入居者は、職員に起こされることなく準備を整え、ベッドに腰掛けるなどして出発を待っていた。補聴器を自らセットし話に耳を傾けている方、町長や警察署長の話に大きくなずきながら聴いている方など、一様に真剣に出動式に臨んでいる。会場内では知り合いの方に声をかけられ涙ぐむ方、会場で顔なじみの民生委員を見つけると手を挙げ「おはようございます」と、ごく当たり前のよう挨拶を交わす。また、町長が挨拶に来ると深々と頭を下げるなど、会う人に合わせて振る舞っている。杜の風で交通安全運動に参加するようになってから毎回参加している方は、張りつめた感じのある出動式の様子にも動ぜず「私は何回もきているから」と落ち着いた様子で臨んでいた。

6 参加者の様子・職員の感想

(入居者)

- 町長や顔見知りの民生委員さんから挨拶されると頭を下げて挨拶を返していた。その後も真剣に町長さんの話しに耳を傾けうなずいていた。「今回も交通安全頑張ろう」と話すと、「そうだね、頑張りましょう」とこぶしを挙げ、「オー!」と声を上げて笑っていた(Tさん)。
- 顔見知りの民生委員さんを見つけると片手を挙げおはようございますと挨拶していた。また、町長さんには深々と頭を下げていた。補聴器を自らセットし、町長、警察副署長などの言葉に耳を傾け、満足そうに帰宅している(Sさん)。

- 久しぶりの活動に少し緊張した面持ちであった。後から「私は何回も来ているから」とベテランらしい落ち着いた姿で参加していた。民生委員さんとも当たり前といった感じで挨拶を交わしている。帰宅後も「今日はいいもの見させてもらいました。ウチにいたらとてもいけないわよ。長生きしてありがたや」とニコニコしていた(Sさん)。
- 職員の出勤よりも早く起きて支度をすませ、玄関で待っていた。出動式では欠席したHI心配をしており、戻ってから出迎えてくれたHIさんに報告しながら缶コーヒーを差し出していた(Dさん)。
- 昨日は体調不良で今朝は行く気満々で身支度を整えていた。帰宅後、出動式で町長が杜の風の街頭指導についてふれたことを話題にすると大きくうなずき感慨を受けている様子であった(Iさん)。
- 役場では、知り合いの方々に声を掛けられて涙ぐむ場面も見られた。町長の挨拶では、感動した様子で涙をこらえていた。帰宅後に感想を聞くと「久しぶりに役場にいき、いろんな人たちに会えて良かった。」と笑顔で話していた(Uさん)。
- 今朝はいつもよりも早く起床し、「行くのすか～」とやる気満々であった。出動式の間は「手が冷たいんだ」と何度も訴えていた。同じ部落の方々も来ており声を掛けられるとケアワーカーに紹介してくれていた(Tさん)。
- 行ききの車には一番に乗り込み出発した。出動式では、隣に座った若生キヨ子殿と知り合いだったので、声を掛けられると笑顔で顔を見つめ返していた。帰宅後は疲れたのかウトウトしていた(Tさん)。
- 昨夜は緊張して眠られなかったと話していたが、出かける前に小さいパン2個をしっかりと平らげて張り切っていた。式の後には、親戚だという町長に声を掛けられ、お互いの近況を報告していた。帰宅後は次の街頭指導の日を確認し、楽しみにしている様子であった(Wさん)。
- 久しぶりに色々な人に会えて良かった。楽しかった。今後も頑張りたい(Oさん)。

**(介護職員)**

- 長期として初めて参加したが、やはりMさんは、行く事が当たり前になっている事が新鮮であった。地域のとのつながりを垣間見られて、改めてこの交安に参加する意味を感じた(Iさん)。
- 地域の方々と触れ合っているのは見えない表情を垣間見ることが出来た。また、けやき街の民生委員の方が今年初めて参加してくださったので、地域とのつながりをより強く感じる事ができた(Eさん)。
- 雪の中どうなるか不安だったのだが、役場内での実施だったので寒くなくて良かった。入居者の方々も真剣に聞いている姿があった(Tさん)。

#### (4) 交通安全街頭啓発

交通安全街頭啓発は、交通安全県民総ぐるみ運動の中心的事業で、関係機関や協力団体が、特に交通量の多い交差点を選んで、街頭で直接地域住民に交通安全を訴える啓発活動である。啓発活動の場所には、運動の基本理念が書かれた横断幕を掲げ、参加している高齢者はお揃いのジャンパーやたすきを掛け、小旗や手を振って交通安全を訴えている。この場所は、小学校の校門近くであることから小学生が多く、「おはようございます」といった朝の挨拶が多く交わされている。



写真 8 小学校前での街頭啓発 1

写真 9 小学校前での街頭啓発 2

#### (初日の様子)

1 日 時 平成 18 年 4 月 10 日(月) 午前 7 時 30 分から

2 場 所 富谷小学校交差点・校門付近

3 参加者

- ・特養 入居者 7 人 介護職員 4 人
- ・認知症高齢者グループホーム 入居者 1 人 介護職員 1 人
- ・民生委員児童委員 5 人
- ・施設職員 3 人(介護課長・ケアマネージャ・看護師)

4 当日の様子

天候にも恵まれた初日となった。入居者のやる気がひしひしとを感じる。初日とあってか、準備に手間取り出発に計画よりの多くの時間がかかる。街頭啓発中、富谷町町長が車の中から手を振って入居者を激励していた。

5 参加者の様子・職員の感想

#### (入居者)

- 今朝は霜が降り少し寒い朝だったが、子どもたひに大きな声で「おはようございます」といつもより元気な声で挨拶している。「明日も行くのか尋ねると「うん」と軽い返事。すっかり板についている感じである(Iさん)。
- 身支度をすませ出発を待っている。小学校の校門の所で、一人ひとりに笑顔で「おはようございます」と小柄な身体から見上げるようにして元気に挨拶している。帰り際には日射しも温かくなり、「子どもたち元気でいいなや」と。「明日いぐの俺ばりがあ?」「明日誰来んの?」と、終わったばかりなのに、もう明日のことを気にしている。参加意欲満々の様子を見せている(Dさん)。

- 朝早目に起床して身支度を整えている。「お疲れ様でした。今日は如何でした?」と聞くと、「子どもたちから元気をいただけてまいりました」との答えが返ってきた。また、「明日も早く起こしてね」と介護職員に明日の起床時間を確認している(Sさん)。
- 起床時に、交通安全に出かける旨の話をする「そうすか?」と余りピンときてないように様子が見受けられる。しかし、出かける準備を始める頃になって、交通安全用ジャンパーを着始めると、思い出したように他の入居者に朝の挨拶をしながら「今から交通安全さ行ってくっからね」と言いながらユニットを後にして集合場所になっている施設の玄関に向かって行った。小学校に着き小学生が来始めると、無言で子どもたち一人ひとりに頭をペコリと下げる挨拶をしている。「声に出して挨拶しないと子ども達には伝わらないよ」と介護職員が助言していたが、「いいんだ」と、本人流の挨拶を続けている(Tさん)。
- いつもよりも早い起床時間だったので、送迎用の車内では眠そうな表情をしていた。小学校に到着し、登校してくる小学生達を見ると目が覚めた様子で、手に持った旗を振りながら校門の中に入っていき小学生を目で追っていた(Kさん)。
- 参加することを考えると緊張して眠れなかったと話し、いつもよりの早めに起床して身支度を済ませていた。一番初めに集合場所の玄関まで来て、送迎車輛がくるのを待っていた。小学校に着くと顔見知りの民生委員や町内会長に声を掛けられて笑顔で挨拶を交わしている。小学生には旗を持って「おはようございます」と声を掛けていた(Wさん)。
- 出発前から「(小学生は)かわいいのよね。」と楽しみにしている様子。ニコニコと笑いながら「おはよう」と挨拶し、小旗を小刻みに振っていた(Oさん)。

#### (介護職員)

- 街頭指導日の初日ということで、ビデオカメラや、デジタルカメラは前日に準備していたが、確認が不十分であった為に、きちんと作動させることが出来なかった。事前に書面で当日の係分担を示していたが、当日になると混乱があり、役割分担どおりに事が進まない場面もあった。書面だけでなく口頭でも説明や協力を呼びかけておくべきであったと反省した(Eさん)。
- 初日にふさわしい良い天気恵まれ、気温も程ほどよい日よりであった。小学校近くの交差点に向かう車中で、出勤式でも一緒になった K 子さんと「この間は雪だったけど、今日は晴れてよかったなあ」と隣り合った席の二人が話し合っている。入居者が交通安全ジャンパーを手にして交通安全街頭啓発を思い出す姿を見て「継続は力なり」の言葉を思いだした。やはり言葉でピンとこなくても、いつものアイテム一つでパツと思わせる、視覚に訴える大切さも改めて感じた。ただ、準備がきちんと出来ておらず、いざ始まるとカメラ、ビデオがすぐに作動できなかった事が残念。また、集合時間に遅れてしまい、民生委員の方々を待たせてしまう失敗も大いに反省したい(Iさん)。
- 目の前を小学生が通っていくと入居者みんなが元気に挨拶しており、とてもいい表情をしていると感じた。交通安全の意識よりも、小学生と身近に触れ合う事で喜びを感じながら地域に参加しているのだと感じた。小学生や他の方々と関わり合う機会をもっともっと多く持つ必要があると思った(Yさん)。

## (街頭啓発二日目)

1 日 時 平成18年4月11日(火)午前7時30分から

2 場 所 富谷小学校交差点・校門付近

3 参加者

- ・特養 入居者9人 介護職員4人
- ・認知症高齢者グループホーム 入居者2人 介護職員1人
- ・民生委員児童委員5人
- ・施設職員3人(総務課長, ケアマネジャー, 事務職員)

4 当日の様子

昨日, 小学校の入学式があり, 今日から一年生も加わり, かなりにぎやかな街頭啓発となった。新一年生の挨拶が元気よく, 入居者は目を細めて身を乗り出すようにして朝の挨拶をしていた。

5 参加者の様子・感想

- 職員が来る頃にはすっかり身支度を整えて職員が来るのを待っている。服装が寒くないか心配したが, いつものようにスカートをはいて出かけている。校門前で静に旗を振って子どもたちをむかえていた(Sさん)。
- いつもよりのだいぶ早く起床して準備をしていた。出発まで何度も正面玄関へ行ったり来たりと, 今か今かと出発を待っている様子であった。出発時からニコニコと笑顔が見られている。「初めての参加だからだからよろしくね」と言う管理職員の言葉に, 余裕の笑顔を見せながら頷いている。子どもたちには真っ先に「おはよう」と声をかけ, 登校する子どもたち全員にまんべんなく声をかけている。帰りの車の中でも「毎日くっからな」と, 明日のことを介護職員に約束している(Dさん)。
- いつもよりもだいぶ早い時間の起床だった。本人曰く「はりきって眠られなかった」とのこと。いつもより言葉が多く, 元気いっぱいの様子。子どもたちに「おはよう」「元気だね」「頑張ってるね」と笑顔で声をかけている。新一年生の黄色い帽子やかばんを見て, 「かわいいね, あんな時が一番だよね」といい, 最後まで笑顔とお話しが途切れることがなかった(Hさん)。
- 朝3時には目を覚まし, 交通安全について語っている。6時前には身支度などの準備を始め, 動きがいつもよりもきびきびして張り切っている様子が伺える。天気は悪く肌寒かった為か, あまり声はでなかったが, ニコニコと笑いながら手を振っていた。帰りのバスの中で, 「子どもたちの顔が沢山見られてよかった」と話している。(Kさん)
- 子どもたちに大きな声で「おはようございます」と挨拶していた。挨拶が返ってくると, 笑顔で「かわいいね」と言っている(Hさん)。
- いつもはゆっくり起きるが, 本日はいつもより早めに起きている。「今日行く日なのね?」「子どもいるかしら?」と出発前から楽しみな様子。民生委員のAさんに声を掛けられ元気に挨拶していた。子ども達に「おはよう」「行ってらっしゃい」と声をかけていた。「また行きたいわ, 楽しかった」と話している(Sさん)。
- 昨日から「小学校へは私が行くからね」と話し, 朝早くから準備している。長い時間立ったままでは疲れるので椅子を進める「立つのも修行だから」と立ち続けて子どもたちに挨拶をしていた(Iさん)。

**(街頭啓発三日目)**

1 日 時 平成18年4月12日(水)午前7時30分から

2 場 所 富谷小学校交差点・校門付近

3 参加者

- ・特養 入居者 12人 介護職員 5人
- ・認知症高齢者グループホーム 入居者 1人 介護職員 1人
- ・民生委員児童委員 10人
- ・施設職員 2人(ケアマネジャー, 栄養士)

4 当日の様子

あいにくの小雨模様の天気であったが、入居者の多くは熱心に参加していた。入居者の皆さんにとってはこんな雨は何でもないといい様子であった。寒さや疲労の度合いなどを心配する職員もいたが、やはり安心して雨の日でも街頭啓発していただくにはどうすべきかを考える必要があるのではないかと考えさせられた。校長先生をはじめ先生方もたくさん激励の言葉を掛けていた。

5 参加者の様子・職員の感想

- 小雨の中、子供たちに声掛けている。入居者の中では男一人だったので、少々寂しい面もあった様であった。朝食時に施設長が食卓に来て「私も明日は行きます」というと、「オッ」と声を上げ、にこやかな表情を見せる。(Iさん)。
- 小雨にも関わらず元気に子供たちに声を掛けている。雨が強くなり始めたので、早めにきりあげて来た。心残りなのか道路ですれ違う子供たちに大きな声を掛けていた。(Dさん)。
- 雨の中を待っていてくれた民生委員さんに挨拶をしてから校庭へ向かう。雨なのに小学生が長靴を履いていない事を心配している(Hさん)。
- 「天気悪いけど大丈夫?」と声を掛けると準備を整え「大丈夫だよ。千葉さんこそ大丈夫?」とかえって心配されてしまう。昨年参加した際は「おはよう」の声がなかなか出なかったが、今回は声も大きく参加意欲が強いと感じられた。民生委員さんにも「いつもお世話様です」と挨拶している(Uさん)。
- 小雨降る中交通安全に出掛けた。同乗者から「今回で何回目?」と聞かれると「3回目だ」と、誇らしげに答えている。雨足が強くなってくる中、雨具を着込みこれまでと同じように、無言で頭をペコリと下げる本人流の挨拶を繰り返している。民生委員が声をかけると「どうも、どうも」とニコニコしながら挨拶を交わしていた(Tさん)。
- 家族の励ましもあり意欲的に進んで参加してくれる入居者が多くなった。大きい声で挨拶している姿を見てとても嬉しく思った。帰宅後、入居者同士で労をねぎらっている様子があり、継続して行うことのすばらしさを実感した(Cさん)。
- 雲行きが怪しい中、「本当に行くのかな?」と半信半疑で出勤すると、すっかり支度を整えて私たちを待っている。「雨降りそうだけど大丈夫?」と声を掛けると「雨降りでも子どもたちが学校にくるから」と言う返事。さりげない返事だったが、使命を感じているようにさえ見えた。初めて雨の街頭啓発だったが、それでも必死に挨拶する入居者らの姿を見て、自然と自分の役割、地域の一員が身につけているように見えた(Iさん)。

**(街頭啓発四日目)**

1 日 時 平成18年4月13日(木)午前7時30分から

2 場 所 富谷小学校交差点・校門付近

3 参加者

- ・特養 入居者13人 介護職員6人
- ・認知症高齢者グループホーム 入居者1人 介護職員1人
- ・ケアハウス 入居者4人 職員1人
- ・民生委員児童委員5人
- ・施設職員5人(施設長,生活相談員,看護師,事務職員)

4 当日の様子

昨日とは違って変わって晴天で朝陽を浴びての街頭啓発であった。この日の参加者は多かったためか、一人で登校する小学生は大きな声の挨拶にびっくりする一幕もあった。一緒に参加していた教頭先生から、入居者が子どもたちとまんべんなく接するようにと、声をかける位置などについてアドバイスがあった。

5 参加者の様子・職員の感想

**(入居者)**

- 前を通ってくる子供たちを興味津々で見ている。最初から最後まで子供たちを目で追っていた。後感想を尋ねると「楽しかった」「めんこかった」と満足の様子。帰宅してからの朝食時には、早起きのせいで眠気が出てきたのか、うとうとしていた(Kさん)。
- 移動中の車内でも小学校に行っても歌をうたってとても楽しそうだった。子供たちが登校してくると「おはよう!」と挨拶する。帰りも「疲れていませんか」と聞くと「疲れてない」「子供ってめんこいな」と元気そうに笑顔で話す(Tさん)。
- 車の中で挨拶の練習をしていた。小学生の姿を見て「かわいいねー」と何度も話し、満面の笑顔を見せていた。終始穏やかな表情を見せ挨拶していた(Oさん)。
- 今朝も4時過ぎには身支度を始めていた(Iさん)。
- 校庭の入り口で児童の登校を待つ。一人、二人と子供たちが次々と登校してくると、ニコッと笑い「おはようございます」と元気に挨拶した。子供たちに向ける優しい笑顔はとてもすてきだった(Dさん)。
- 校庭の入り口に腰掛け、次々と登校する児童に「おはよう、かわいいね」と笑顔でお迎えをしていた。「子供って何てかわいいのだろう」と話していた(さん)。
- 「疲れた」と言いながらも皆さんと一緒に参加した。校庭の入り口に腰掛け、一人ひとりの児童に「おはようございます」と笑顔と一緒に片手を挙げていた。とてもやさしい笑顔だった(Sさん)。
- 朝5:30から街頭指導に行く為に食堂で待っていたようだった。小学校校庭へ行ってからも元気に挨拶をしてくれていた。昨日の雨で、校庭に水溜りができていたのを見て、「どうにかしてあげたらいいのに」と水たまりがとても気になった様子であった。背の大きな小学生を見て「あら〜」と驚いていた(Fさん)。

**(介護職員等)**

- 職員も地域に密着し、地元の住民になっている。地域住民にどれだけ信頼があるかが見えていた。支援の幅は広がってゆくと思う(U施設長)。
- 入居者と民生委員、そして職員の関係がとてもよく感じました。入居者も、子供の姿を見て笑顔

- が出たり、声を掛けたりといった姿を見ることができた(K 生活相談員)。
- 入居者の方々が元気に「おはよう」と言っていて、子供たちも元気に返答していて、清々しい気持ちになりました。事故や気分不良になる人もなく良かった(T 看護師)。
  - 暖かい日だったので、入居者の方の表情も明るく、時間を忘れるほどに職員自身も楽しませていただいた。また、入居者の方は子供の目線で見ていると感心させられた。「水溜りを何とかしたらいいのに」と心配している様子が印象的だった(U 生活相談員)。
  - 今日は天気にも恵まれ 4 名参加した。利用者の方々の元気には圧倒された。児童に向ける笑顔はとても素晴らしかった(T さん)。
  - 昨年までの参加では「私どうしてここにいるの?」など迷っている様子が伺えたが、今年は、子供たちの姿に素直に「かわいいねー」と見守る眼差しに変化を感じ、参加 2 年目にして見られた嬉しい変化だ(C さん)。
  - 新入生が元気良く挨拶しながら校門を駆けって行った姿を見て、小学校に街頭指導して 4 日目とあって、学校全体に浸透していったと思った(K さん)。

**(街頭啓発五日目)**

1 日 時 平成18年4月14日(金)午前7時30分から

2 場 所 富谷小学校交差点・校門付近

3 参加者

- ・特養 入居者 13人 介護職員 7人
- ・認知症高齢者グループホーム 入居者 1人 介護職員 1人
- ・ケアハウス 入居者 2人 職員 1人
- ・民生委員児童委員 3人
- ・施設職員(管理者など) 3人

4 参加者の感想・職員の感想

**(入居者)**

- 満面の笑顔で最終日も挨拶を元気にしていた。児童一人ひとりに手を振って学校へと送っていた。校長先生と挨拶を交わし、帰り道、「もう終わりすかわ？」と淋しそうに言うので秋も行きましょうと励ますと「はいいきます」と元気になった(Dさん)。
- 校長先生からの挨拶に対して自らそばに寄り「こちらこそ楽しい思いをさせてもらいました」と微笑みながら応じていた(Sさん)。
- 「あ～いがあったいがあった。」と帰ってくる。子供たちに握手を求められて、ニコニコ笑顔で応じており、充実した笑顔がほほに口元に残っていた。朝食では、「随分と挨拶できるようになったっちな。うちの人たちがちゃんと教えてんだべな。んでも私たちのお陰だべか？」と話していた(Hさん)。
- 校門前で挨拶をしていると、かわいい女の子がわざわざ近寄って挨拶するのを見て笑みが止まらなかった。今回は全日参加しており、帰宅後に園長よりごくろうさまと声を掛けられると「どーも」と嬉しそうにお辞儀を返していた(Iさん)。
- 子供たちに「お体大事にしてください」と声を掛けられ握手している姿を見られ、「嬉しいねー」と一緒に参加していた方と話していた(Kさん)。

**(介護職員等)**

- 初めての参加で戸惑いはいりましたが、交通安全を通して入居者の方々の普段では見られない笑顔が見られて良かったです(Iさん)。
- 一列に並んだが風が当たる方向だったので「寒いね」と民生委員さんからの声がきかれた。民生委員さんが積極的に子供たちの手を取り入居者と握手させてくれていたのが良かった(Iさん)。
- 今回初めて交安に参加して感動しました。寒い中子供たちの姿に元気で挨拶している姿が生き生きして、私自身も活力をもらいました(Sさん)。

## (5) 春の交通安全運動反省会

1 日時 平成18年4月17日(月)

2 場所 杜の風ケアセンター

3 目的

4月15日(金)までで春の交通安全運動が終了したことから、入居者、協力した民生児童委員及び介護職員の計19人が参加して、春の交通安全運動実施に関する反省会を行うもので、この反省会は、主として入居者の参加意欲と役割意識を高める目的で行われている。

4 参加者

- ・特養 入居者8人 介護職員5人
- ・認知症高齢者グループホーム 入居者1人 介護職員1人
- ・民生委員児童委員 1人
- ・施設職員(管理者など) 3人

5 参加者の感想

(入居者)

- 5日間休まず参加したが疲れなかった。丈夫でいるうちは参加したい(Dさん)。
- 楽しく参加できた。子供さんと握手を交わしたりして、ふれあえてよかった。子供たちからも元気をいただいた(Sさん)。
- 小学生が立派だった(Uさん)。
- 最初は行かない予定だったが、1日参加した。前日から楽しみにしていた(Uさん)。
- 自分の役目だからやらなければいけないと思った。(前日から靴を用意して張り切っていた(Tさん))。
- お世話になりました(Tさん)。
- 朝早起きするのに、緊張して一晩中眠れなかった(Wさん)。
- 子供たちがかわいかった。足が不自由だが元気いっぱいです(Oさん)。
- 出勤式は伊藤孝男さん以外の人にも参加してもらった(Oさん)。

(介護職員等)

- 皆さん生き生きと活動していた。ビデオ操作の人は事前に打ち合わせが必要だった。街頭啓発の時間が短く感じた(K管理栄養士)。
- 近所の子供たちに前もって言っておいた(Yさん)。
- 参加された利用者のみなさんは、前日から心構えが出来ていたようだ(Iさん)。
- ユニットに戻ってきた姿が誇らしげで参加していただいて良かった(Sさん)。

## 資料 7 地域福祉フォーラム発表原稿

「新たな福祉を創り出す立場になって感じること」

富谷町鷹の杜町内会長 門間とも子

### 【はじめに】

今、第 1 回目の地域福祉フォーラムで、ゆとりすとクラブの紹介をしながら「自分らしい生きかた」について話したことを思い出しております。以来、とうみやの社(社の風)を見守り続け、地域福祉フォーラムに参加し続けて感じていることは、地域の変化です。今日は、その地域の変化とこれからの期待についてお話しします。

### 【地域の変化について】

一つ目は、地域住民の特別養護老人ホーム社の風をはじめとする施設を見る目が変わってきているということです。これまで、鷹乃社では、地域の会館で実施しているゆとりすとクラブ(地域のお茶飲み会)の会場をとうみやの社に移し、鷹乃社から社の風に転居した方を訪ねるなどの工夫を積極的に行い、社の風での暮らしを理解していただくように努めてきました。そのなかで、自室のしつらえや和やかにお茶飲みしている暮らしぶりを見て、「施設での暮らしもちちょっといいじゃない」、「ここだったら、体が不自由になっても、安心だね」といった声がよく聞かれます。このことは、これまでの施設観を大きく変える出来事でした。二つ目は、民生児童委員さんが身近な存在になつてきているということです。民生児童委員さんは、社の風で暮らしている方々の相談役となる一方、地域の方々の様子を入居者に伝え、社の風の生活を地域の方々に伝えて、地域と施設をつなぐ情報の橋渡し(パイプ)役となっています。このことにより、地域の方々と話すきっかけが多くなり、民生児童委員が地域の方々にとってより身近な存在となつてきています。三つ目は、地域福祉フォーラムへの関わりや子どもたちの発表を通して、地域で元気に生きるということを学んできたように思います。自然にあいさつを交わし、子どもたちが危険な事をしていたら大人が注意できる、そんなことが何気なくさりりとできる地域づくりが必要なのだと改めて感じ、地域の力を再認識しています。

### 【これからへの期待】

今後、高齢者の住まいは、多様化するのだらうと思います。そんな時、住む場所によつて自分らしさが失われていくのは悲しいことです。施設での暮らしであつても、自分の生活スタイルを崩すことなく、もっと得意なこと(漬物づくり、歌、お花、写真にお裁縫など)を生かして、自分自身の楽しみだけでなく、みんなの役に立っているという充実感を持っていられたら素敵だと思います。地域の方々が隣近所に遊びに行く感じで、自然に行き来のある暮らしを望みます。若い介護職員の方々からパワーをいただいて、明るく積極的に暮らしたいものです。これからは、きっとそんな暮らしが実現するものと信じています。また、地域では、子どもたちがのびのびと元気よく暮らせる地域であり続け

ること(次世代を育む場としての地域社会)が求められています。年代にかかわらず、地域での暮らしは、地域の社会資源が協力し合って成り立ち、それが地域福祉の原点なのだと思います。そのためには、地域も一緒に歩みます。どうぞ、みなさまよろしく願いいたします。また、近い将来発生するといわれている官城県沖地震、その際避難所では暮らせない誰かの手助けが必要な方々の生活の場所として施設を提供いただけたらこの上なく安心です。最後に、今、新しい試みは、苦しみも多いけれど、信念とみんなの力が合わされば、必ず成就すると感じています。「新しい福祉は私たち自身が創っていく」そんな想いを持ちながらお話を終わらせていただきます。

## 資料 8 節分交流会概要

### 節分交流会概要

- 1 日時 平成 20 年 2 月 7 日(木) 10 時 45 分から 12 時
- 2 場所 うぐいすの里「公民館」及び各ユニット
- 3 参加者 鶯沢小学校 4 年生 20 人 学校長 担任  
うぐいすの里(特養・グループホーム・ケアハウス)入居者 施設職員
- 4 事業の様子

#### (概要)

節分交流会は、開設当初(平成 17 年度)から始まり今回で3回目を数える。鶯沢小学校 4 年生 20 人が 2,3 人 1 組になって各ユニットを訪問し、豆まきや楽器演奏・ダンスなどをした後、公民館で紙芝居を一緒に見る交流が行われた。今回から、入居者と小学生が一緒になって紙芝居をみる企画が新たに加えられた。この企画は、うぐいすの里「公民館」で行っている鶯沢小学校の児童とその親を対象とした「マンガ教室」の講師の母親がオリジナル紙芝居を行っていることから実現した。

#### (大まかな日程)

- ・10 時 45 分 鶯沢小学校 4 年生 20 名が担任に引率され徒歩で公民館に到着
- ・10 時 50 分 小学生代表挨拶, 施設長歓迎の挨拶
- ・11 時 00 分 注意事項を説明後, 各ユニットの職員が小学生を各ユニットへ誘導
- ・11 時 10 分 各ユニットで交流開始(豆まき・歌, リコーダー及びダンスなどを披露)
- ・11 時 40 分 紙芝居「伊達政宗」「ひっくりたっくり」
- ・12 時 00 分 終了

#### (豆まきの様子)

小学生は 2,3 人 1 組で各ユニットに入り, 自作の鬼の面を付けて豆を当てられる役と, お年寄りが何度も豆を投げられるように, 投げつけられた豆を拾ってお年寄りに渡す役に分かれている。鬼役には, 開会時に注意事項として, 豆が当たりやすいようにゆっくりと逃げる(動く)などの説明が行われている。お年寄りは, 鬼役の子どもに豆を強く投げつける様子はなく, 下手投げで豆をばらまくような感じであった。子どもたちは, 逃げ回ることにはせずに体を左右に振るなどして, 汗をかきながら鬼役をしていた。お年寄りから「鬼は外, 福は内」のかけ声はなかなか出ず, 職員が声を出して盛り上げようとしていた。以前は, 自分(お年寄り)が鬼役になって子どもや孫に豆をまかせて楽しませていたのであろう。そんな過去の経験が少々戸惑いを持たせているのかもしれない。このためか, 鬼を追い出すような迫力のある豆まきにはなっていないが, 子どもたちをニコニコして見ている様子が目立ち, 各家庭とは趣の異なる豆まきであった。

#### (歌, リコーダー演奏, ダンスの披露)

小学生の自己紹介後、自ら構成したプログラムで歌、リコーダー、ダンスが披露された。ダンスでは「よさこいソーラン」が行われ、音楽に合わせて手踊りをしているお年寄りもいた。軽快で聞き覚えのある乗りの良い音楽にはお年寄りも手拍子などで応えている。また、高齢者の名前や出身を聞いてメモしているグループもあった。予定されていた豆まきや歌やリコーダー演奏が終わると全員が握手して交流を締めくくる様子が見られた。また、ユニットからは、児童に対して事前に用意していた豆をプレゼントするなどの様子が見られ、交流の締めくくりに双方の思い入れが感じられた。

### （紙芝居鑑賞）

作品は、漫画家の息子が書いた作品を紙芝居用に編集したもので、仙台藩祖伊達政宗が幼名梵天丸と呼ばれていた頃を題材にした「伊達政宗」と地元につながる民話「ひっくりたっくり」である。

紙芝居は、高齢者と小学生で公民館が満員の状態で始められ、高齢者と小学生が一緒になって聴いている。「伊達政宗」のお話は、迫力と緊張感が交差し手足を踏ん張って聴いている感じがあった。反対に「ひっくりたっくり」は楽しい雰囲気

写真 10-1 紙芝居を見入る二人  
漂う笑いの多い中で聴いていた。



### （事業終了時の様子）

予定よりもだいぶ遅れて交流会が終わった。子ども達は、自分が訪問したユニットの高齢者のところに足を運び「また来ますから」などと言葉をかけながら握手している様子が公民館の随所に見られた。ほんの短い時間ではあるが、10人程の高齢者と2,3人の小学生の組み合わせは、互いの存在意義を見いだすには十分な時間であるように感じられた。

写真 10-2 別れの挨拶



## 資料 9 ひな祭り交流会概要

### ひな祭り交流会概要

- 1 日時 平成 20 年 3 月 7 日(金)9 時 30 分から 12 時
- 2 場所 鶯沢小学校
- 3 参加者 うぐいすの里入居者 12 人 堰根地区自治会 1 人 民生児童委員 1 人  
認知症サポーター 2 人 地域住民 2 人 施設職員 4 人
- 4 協力機関 鶯沢小学校 栗原市社会福祉協議会栗駒鶯沢支所 堰根地区自治会  
民生児童委員(鶯沢地区担当)
- 5 事業の様子

#### (大まかな日程)

- ・09 時 30 分 認知症サポーターとの打ち合わせ
- ・09 時 45 分 うぐいすの里出発
- ・10 時 00 分 鶯沢小学校到着 担任挨拶  
清掃ボランティア開始(窓掃除など)
- ・10 時 20 分 歓迎の歌(音楽教室)・校舎案内
- ・11 時 15 分 4 年生教室での交流
- ・11 時 30 分 交流会終了
- ・11 時 45 分 帰宅(うぐいすの里到着) 写真 11-1 担任歓迎の挨拶
- ・12 時 00 分 認知症サポーターとの意見交換・解散



#### (窓拭き)

本事業を行うに際して最も大切にしている内容である。入居者は、1 階交流ホール、2 階北側、2 階南側の 3 班に別れて窓や手すりの掃除が行われた。学校の中に入ることに体が希なことなのか、あらゆる物に興味関心を示しながらの掃除となり、手の動きが度々止まる。それでも、教室入り口のガラス戸等、子どもたちのいる場所では、自然と笑みがこぼれ手の動きに力が入るのがわかった。 写真 11-2 認知症サポーターと一緒に窓拭き



#### (歓迎の歌)

掃除がひととおり終わると音楽室に通された。音楽室では 4 年生が待っており、4 年生全員の掛け合いによる歓迎の言葉、それに続く歓迎の歌としてコブクロの「蕾」が歌われた。この歌で涙ぐむ高齢者が続出した。担任の先生は、この曲を練習するに際して「子供たちにはどんな思いから「蕾」が生まれたのか説明していました。そうすることで、感情を込めるところがどこなのかを理解させたかった」と語っている。その後数曲が合唱、演奏され、高齢者が知っていそうな曲と一緒に歌う場面

も用意されていた。

#### (校舎案内)

1階の音楽室から2階にある4年生の教室に移動する際に、校舎内の主だった所に小学生が高齢者を案内した。職員室、校長室、パソコン教室等々、手をつなぎ車椅子を押しての案内であった。小学校から50メートル程の場所で魚屋を営んでいたSさん(大正11年生まれ)は、校長室に掲げてあった歴代校長の写真の中に、小学校に通っていた時の校長先生を見つけ、自宅が魚屋だったこともあって近所の人が



写真11-3 職員室を案内される  
多く集まる場所だったことや校長先生や他の先生が学校帰りに店に立ち寄り、お茶を飲んで行ったりご飯を食べに来たりしていたことなど、自分が小学生だった頃のことをとても懐かしがって語っていた。

#### (教室での交流)

4年生の教室の黒板には、「うぐいすの里のみなさんようこそ まどふきをしていただきありがとうございます けんがくは楽しかったですか! いつでも遊びに来てください」と書いてあった。高齢者からは歓迎に対する感謝の言葉が述べられ、小学生からは、小学校に来ての感想を求める発言や窓拭き掃除への感謝が語られた。その後、節分交流のお礼として特別養護老人ホーム、グループホーム、ケアハウスから、それぞれ交流会の様子を整理したアルバムや雑巾、お礼の手紙集が渡された。



写真11-4 教室での交流



写真11-5 高齢者からのプレゼントを披露する

## 資料 10 節分交流・ひな祭り交流会責任者の感想

私は開所当初、生活相談員という自分の立場が分からず悩んでいた時期がありました。うぐいすの里のようなユニット型の施設では、ユニットリーダーと呼ばれるスタッフが直接利用者の生活を支える中心的役割を担うため、リーダーの力量次第では従来相談員が行っていた役割をリーダーが担うこととなります。このため、相談員という職種の在り方、相談員として自分は何をしていかなければならないのか明確な答えが分からずにいました。今では、このような事業と関わり、自分の果たすべき役割が、理念を守る大事な役割であると、事業との関わりの中で確信し仕事をしています。また、私自身としては、交流について難しく考えているわけではありません。施設に入ってから一人の人間が生活者として暮らすにはどういう支援が必要かということに尽きるからです。

近年、利用者に対する個別ケアや地域密着といった言葉がいろんな施設でブームになっていますが、施設内でどうかしようという従来と同じような発想・考え方では個別ケアや地域密着はもちろんのこと生活者としての暮らしの実現はありえません。暮らしをつくっていくには欠かすことのできない地域という一つの材料を視野に入れなくては、いつまでたっても従来の施設から離れることはできないと考えます。利用者の誰もが、施設を利用する前は地域で暮らしてきたのですから、どの施設においても個別ケアを計画するにあたっては、地域と関わる必要性・重要性は認識していると思います。しかしながら、実際に施設で働いていると、地域との関わり方の必要性について心の底からは気づかないものです。私も上記のように、いかにも地域との関わり方の必要性について認識しているかのように書きましたが、うぐいすの里が開所した当初はあまり重要視していなかったのが事実です。内心必要だとは思っていたのですが、今思うと真剣に必要だとは認識していませんでした。率直に言うと「分かっているようで実は分かっていた」ということです。地域との関わりを従来の行事（踊りや歌の訪問）や単発ではなく、継続的な交流という形で行うことによって初めて本来の人間の暮らしというものを改めて考えさせられ、今まで行ってきた「介護」というものが暮らしのほんの一部分にしか過ぎなかったことを痛感させられました。

また、交流事業を行っていく中でいつも感じることは、私自身が楽しいということです。もちろん実施にあたるまでの計画・準備は大変です。しかしながら、交流の様子をみていると「こんなことをやりたくて、この仕事に就いたんだよなあ」としみじみ思うのです。きっと、どこの特養でも同じような仕事をしている誰もが、入社した時の期待に胸を膨らませていた理想と現実（三大介護中心）のギャップに衝撃を受けたのではないのでしょうか（少なくとも私は受けました）。でも、仕事をしているうちにその現実が当たり前と思うようになっていきます。本当は当たり前ではないのに…。支援をするスタッフが楽しまなくては、利用者の生活に楽しみなんてありえません。そんな思いからも、交流事業の大切さ、必要性があるのではないかと思います（本人の了解を得て原文のまま掲載）。

## 資料 11 お焼香に行った中学生徒への聞き取り調査結果

### 1 調査の目的及び方法など

#### (目的)

この聞き取り調査は、特別養護老人ホームでの体験学習（13歳の社会へのかけ橋づくり事業）を行った鶯沢中学校生徒が、交流事業が終わってからも個人的に高齢者との交流を深め、高齢者が亡くなった際に自宅にお焼香に行ったという場面を捉え、お焼香に至った動機やそれまでの関わりの様子を振り返ることで、高齢者との関わりをどのように捉えていたのかを知るために行った。

#### (対象及び方法)

お焼香に行った3人の中学生への聞き取り調査は、用事があってこれなかった1名を除く2名に対して半構成的面接法で行った。

相手方 鶯沢中学校2年生

①氏名 A(中学2年生)

②氏名 B(中学2年生)

立ち会い 鶯沢中学校 教頭

#### (日時・場所)

日時 平成18年9月5日(火)午後4時15分から

場所 栗原市立鶯沢中学校(栗原市鶯沢)

#### (倫理的配慮)

対象となる中学生には、インタビューの目的や主旨を説明し、テープレコーダでの録音及び写真撮影について同意を得て行った。また、取材の主旨及び内容は、事前に学校側にも説明して了解を得た上で、教頭の同席のもとに行った。

## 2 聞き取り調査結果

### (13歳の社会への懸け橋事業参加以前)

本間 2年前(平成17年2月)、みなさんが小学校6年生の時、うぐいすの里ができて、その時に石膏ボードにメッセージを書いたと思いますが、記憶はありますか。

二人 あります。

本間 あれは6年生の時ですね。なんて書いたか覚えてますか。

A そういうところに行く人も多いから、元気に長生きしてくださいと書いた。

B 少し忘れてしまったんですけど、長生きしてくださいと体を大事にしてくださいと書きました。

本間 みんな同じようなことを書いているね。分かりました。ありがとうございます。あれは学校で書いたんですね。その時の感想とか、どんな気持ちだったか覚えてますか。担任先生から言われたのかな。書いてくださいとか。どのような説明でしたか。

A 今度新しい老人ホームができるから、お年寄りの人たちが楽しく過ごせるとか、不安がらないように元気つけようとかみたいなことを言われました。

本間 特養ができた6年生の時、交流はありましたか。

二人 その時はなかった。(6年生の3月卒業間近に書いている)

本間 特養ができる前に、お年寄りとの交流の授業はありましたか。

A (鶯沢社協隣の)デイサービスセンターを見学したことがあります。

本間 何年生の時ですか。

二人 5年生の時です。

本間 それが初回ですか。

二人 はい。

本間 Aさんは祖父母と同居していませんが、お年寄りの方々とふれあう機会はそれまであまりなかったのですか。

A そうです。

本間 Bさんは、家では祖父母とは、当たり前のようにふれあっていますか。

B 当たり前、ですね。

本間 祖父母は何歳くらいですか。

B 若くて元気です。

本間 特養の入居者と比較するとどうですか。

B 若くてイメージは別です。

### (13歳の社会へのかけ橋づくり事業時の様子)

本間 小学校を卒業して中学生になってから、平成17年11月に「13歳の社会へのかけ橋づくり事業」が行われましたが、それ以前に特養との交流はありましたか。

A 無かったです。学校の授業で訪問をしてからです。

B 学校の授業でみんなと行ったのが初めてです。

本間 その時は6人が1グループになって行きましたけど、事前にお年寄りについて勉強していくのですか？

二人 してないです。

B 最初にお年寄りが楽しめるようにと簡単なゲームをしようと考えて行きました。自分たちのグループ(Aちゃんと一緒)は特養でまんさく(ユニット)に行きました。自分たちのグループはプレゼントを用意して行きました。

本間 それは誰かの考えですか。それともグループの考えですか。

B Aちゃんの提案です。グループみんなで話し合ったら、記念になるものがほしいという話になって、いろいろ考えて、脳の活性化のために本を読む人もいるのではないかと思って、落ち葉のしおりを作ったんです。

本間 簡単なゲームというのは先生から話されてそうなったのですか。

二人 はい。

B せっかく行くのだから記念になるものを持って行こうかと考えたのがAちゃんです。

A 持って行こうと言ったのはみんな、落ち葉のしおりの案を考えたのが私です。

本間 すごいね。

A たまたまかな。

本間 大成功だった？持って行って喜ばれましたか。

A 「ありがとう」と、言われて泣かれました。

本間 落ち葉をラミネート加工してパンチを入れて、しおりにしたのですか。

二人 はい。

本間 毛利さんは本が好きだと言っていたから、喜ばれたらうね。

A 泣かれました。あと肩もみもしました。他の人も喜んでいました。

本間 訪問して一番初めに何をしましたか。

B 自己紹介です。

本間 その次は。

B ゲーム(輪投げ)をしました。

A おばあちゃんたちが入れやすいように、なるべく大きい輪にして、棒もなるべく入るようにサッと移動したりしました(輪を投げた後に、輪が的の棒に入るように棒を生徒が移動している)。

本間 ゲームはみんなの手作りだったの。

二人 はい。新聞紙を細長く丸めたものを繋げて、ガムテープで固くして飛ぶようにしました。(的は)ペットボトルを棒代わりにしました。

本間 考えたね。

二人 (笑い)輪投げのパーツはグループ内でノルマを決めて、各自家で作ってきました。

本間 事前の準備段階の打ち合わせでそのように決めたのですか、それとも休み時間を利用して打ち合わせたの。

二人 授業の中の事前計画を立てるときに輪投げを考えました。しおりは昼休み時間に落ち葉を集めて作ったんです。グループの他のメンバーが朝早く登校して協力してくれました。

本間 まんさく(ユニット)の掃除もしたの。

二人 はい。

本間 学校の授業の項目に施設に行って掃除をして交流するというのがありましたが、みんなはそれ以上のことをいろいろやったね。ゲームをしたり肩もみをしたりプレゼントまでして。泣いて喜ばれるわけだよ。

B その時に「長生きしてね」と声をかけたら、毛利さんが「ありがとうありがとう」と言って、自分の子どもが自分より早く死んでしまったことを話してくれました。「なみさん(毛利さん)はもっと長生きしなきゃね」と話すと、「ありがとうありがとう」と言いながらずっと泣いていました。

本間 訪問したときの毛利さんの印象は。

二人 ちょこんと座っていて、かわいいなあって思ったんですよ。一番親しみやすかった。

本間 目がクリツとしているおばあちゃんですよ。

本間 訪問してゲーム大会、肩もみ、掃除などをしてお話しをした。みなさんのイメージとして毛利さんはかわいいおばあちゃんという印象だったのですか。

二人 はい。

本間 他の入居者の方が10名ぐらいいますが、毛利さんが一番印象に残ったのですか。

B 一番ですけど、他の人たちも優しく面白かった。

A たまたま私になみさんの肩もみをして、名前を聞いてなみさんの名前を覚えました。

B それでその時にAちゃんの名前を教えたのだよ。

A うん。プレゼントに自分の名前を添えて渡したら、自分の父が前に住んでいた家は、毛利さん宅の隣だったんですよ。毛利さんは「知っている」と言って、祖父も父の名前も知っていました。意外なところに共通点がありました。なみさんは以前看護婦をしていました。

本間 Aさんが以前住んでいた家の隣に毛利さんが住んでいたのですか。

A 細倉鉦山の近くに古い繋がった住宅（棟割り長屋＝鉦員住宅）があった。その隣に住んでいたのが毛利さんでした。

本間 自己紹介をして A さんが住所を言ったら、毛利さんの方から誰々さんの孫なのかと言われたのですか。

A 「みつはしかえでです」と言ったら、毛利さんから「三橋さんって細倉の？」と聞かれました。「はい」と答えたら「知っているよ」と返事がありました。「祖父の名前が三橋格（いたる）と言うのだけど、分かるの」と聞くと、「分かるよ」と答えたので、あ～、知っているのだ～と思いました。

### （13 歳の社会へのかけ橋づくり事業後の交流）

本間 11 月に訪問しましたが、皆さんはその後にも機会ある毎に訪問していたと聞いたのですが、なぜ行こうと思ったのですか。

B 私は 11 月の訪問の際に毛利さんの誕生日を聞き、「また来るね」と約束しました。誕生日の時（平成 18 年 3 月 29 日）、毛利さんはすごく元気だった。私は用事があって短時間しかいられなかった。

A 休日になみさんに会いたくなかったから、友達を誘って特養に行ったのです。

本間 友達は訪問した 6 人グループのメンバーですか。

A いいえ。たまたま遊んでいた友達です。

本間 気が向いたときと言ったら語弊がありますが、部活の帰りに立ち寄るイメージですか。

A 平日はスクールバスで帰るので立ち寄れないのです。休日に自転車で特養までおりにきています（細倉地区から鶯沢地区の特養まで自転車で 15 分程度）。

本間 なみさんに会うために自転車でわざわざ来る感じですか。

A はい。

本間 平成 17 年 11 月 4 日が初回の訪問で、平成 18 年 3 月にも誕生会が行われるので訪問した。

B 3 月 29 日です。

本間 その時もみんなで訪問してくれたようですが、11 月の訪問の時に教えられた誕生日を覚えていて行くことになったのですか。

二人 はい。

本間 特養の方から誘いを受けたのではなくて。

二人 違います。

本間 皆さんの方から特養の方に、なみさんと約束していたので伺って良いか尋ねたのですか。

B 11 月の訪問の時に、なみさんの誕生日にまた来ることを伝えていました。（当日連絡もしないで）行ったら、特養の人たちが約束したことを覚えていてくれて、ケーキを準備してくれました。

二人 その時のケーキがプリンだった。なみさんはプリンが好きのため、大きなプリンのケーキでした。

本間 他の入居者から食べ物を勧められなかった。お年寄りの方が食べるよりも子ども達とかに食べて貰うことが嬉しいらしいよ。

二人（笑い）いっぱい食べた。

本間 なみさんがプリンが好きだという事は、11月の交流会の時に聞いていたの？

B 11月の交流会の時は知らなかった。誕生会当日、私は用事があったケーキを食べないで帰った。誕生会話をAちゃんから聞いて、なみさんのプリン好きを知った。

**(毛利さんの死を知ってからお焼香まで)**

本間 7月25日、夏休み(7月24日から)に入ってすぐ訪問した。私が聞いた話では、みんなの友達が葬儀の看板を見たと言いました。

二人 そうです。

本間 その話をきいて、出向いたと聞いていますが、そのへんを詳しく教えて下さい。なみさんを7月25日に訪問するきっかけとなったいきさつを教えてください。

B 袋地区に友達がたくさんいる。その中の数名に、「『毛利なみ』と書かれた葬式の看板が立っていた」(7月23日に栗駒病院で亡くなっている)と教えられた。最初に自分が聞いて驚き、他の友人にも確認したら「たしかあったような気がする」と言われた。信じられなくて、AちゃんとBちゃん(三人で線香上げに行ったメンバーの一人)にも伝えたら、みんな「えー」ってショックを受けた。その時は部活も駅伝の練習も終わっていたから、どうするか3人で相談し、(本当かどうかを確認するために)みんなで看板を探すことにした。

もしも嘘だったら嫌な感じがするから、最初に施設(うぐいすの里)に行って確認することになった。そして、部活帰りに施設に寄ったら「亡くなった」(施設長が説明)と聞いた。

本間 聞いたときどう思ったの。

二人 大ショック。

本間 3人はたまたまバレー部で一緒だったの。

二人 はい。

本間 なぜ、袋地区の同級生は毛利なみさんを知っていたのですか。

B 袋(旧鷲沢町の袋地区)の友達(6人のグループメンバーの一人)の中に、まんさくの部屋(ユニット)にいった人がいて、その人たちから聞きました。

本間 その人は男子ですか。

B はい

本間 11月に訪問した6人グループの一人？

二人 はい。

B 玄関先で(施設長に会って)聞いたなら「亡くなった」と話された。

A 施設で線香をあげられないか施設長さんに聞いたなら、線香は自宅の方でしかあげられないと話された。お家に行きたいと話したら、住所を教えてくださいました。

B その住所は、たまたま友人が誰も住んでいない地区で、どこか分からなくて看板(にある矢印案内)を頼りに探した。やっと見つけたが、家の人バタバタ忙しい様子で、いっぱい車が止まっていた。「あった〜」と言って、そこでうろうろしていたんです。「どうする、行く?行く?」って。そうしているうちに、毛利さんの家の人気づいて、変な目で見られているかなって思って心配した。「どうする?行こう」ってなって行った。家に行く前に、三浦商店で、私(B)はプリンを、Mちゃんはゼリーを二つ買って、それを持って行ったのです。

本間 プリンやゼリーを買おうと思ったのは何ですか。

B 急におじゃまするのも迷惑かなと(思った)。

A 亡くなったときは、みんなお供えをするものかなと思った。

B お世話になったから。

本間 プリンを買ったのは、毛利さんがプリンが大好きなことを覚えていたからですか。

B いや、その数日前に私が夢を見たんです。なみさんの。その時プリンが出てきたんですよ。だから、店に入って、ちらっと見たら、プリンがあったから「これにしよう」って即決まったんです。

本間 毛利さんがプリンを食べている夢ですか。

B なみさんの部屋が(夢に)出て来て「あっ、なみさんの部屋だ、なみさんがいる」って。「なみさ〜ん」って手を振ったんです。そしたらプリンを食べていたんですよ、元気に。

本間 2,3 日前ですか。

B ですね。その後に、こうなんかぶーって真っ暗になってその映像は消えたんです。そして、しばらくしてから起きたんですけど(気味悪そうな雰囲気ではなく、懐かしそうな感じで話しをしている)。

本間 あれ、その日って、多分、亡くなった日(7月23日)ですよ。

B そうですか

本間 毛利なみさんは23日に亡くなっているのです。

B すごい。

A 呼んでくれたのだよ。

B 気づいたのが遅かったのだよ。気づいたのが24日で、こういう夢見たんだけどって言ったんですよ。

本間 誰に

B 二人(A, M)に。そしたら、25日だけ、(葬儀の)看板があがっていた。

A 24日じゃない

B 看板は24日からあがってて。25日にその全部を聞いて、25日にAちゃんとMちゃんに夢の話をして、線香をあげに行った。

本間 夢を見たのは亡くなった時ですよ、今の話だと。たぶん毛利さんは会いたかったんだね、みんななど。お焼香に行って、ご家族はびっくりしていた

二人 はい

B あの日は、普通に遅くない時間に帰ったので、部活が終わったのが1時頃で、少しデイサービスセンターにいて1時半頃で、その後に三浦商店に行って、買って、持って行ったのが2時頃かな。

A 夕方じゃない。

B 夕方ですね。

A 学校出るのが遅かったんだよ。プールに入っていたから。

本間 (焼香にいった)25日って葬式の日。

二人 はい。

本間 皆さんが行ったのは、葬式が終わった後ですか。

B 葬式じゃないよ。

A 葬式の前の日、お棺に入っていた。

B お棺じゃない、布団に寝ていた。だから、お葬式の前の日ではたたばたしてるだろうねと話してて、それでも行こうって話になった。

本間 おばあちゃん(毛利さん)のいるところで手を合わせてきた。(毛利さんは)やっぱり会いたかったのかな。

二人 ……

本間 毛利さんのご家族は忙しくてゆっくりお話もできなくて申し訳なかったって言っていた。遺影があったと思いますが、遺影でなみさんは笑っていましたか。

A 写真ですか。すごく若い頃の写真で顔が違うんですよ。

A (毛利さんは)昔はきれい系だったんですけど、今はかわいいおばあちゃんみたいな。

本間 その写真はきれい系の写真だったのですか。

二人 そうです。

本間 これまでのかわいっていうイメージとはちょっと違ったのだね。

二人 はい。

A でも、寝ているのを見て、なみさんってすごい顔が小さいのですよね。しわくちゃしていてふにゃ～って、で布を被っていても顔が透けて見えるんですよ。「あー、なみさんだ」って思って。

本間 実際11月に会ってから、一緒にお話をしたり、肩もみをしたり、ゲームをしたり、ケーキを喰え～って言われたりして。何回も行って、ちょっと間をおいた後に亡くなってしまい布団で眠っている。そのギャップって大きいじゃないですか。かわいいと思っていたのが声も出さないで亡くなっているわけですよ。その時、死ぬって現実のこととしてはあまり感じたことがないじゃない。今、振り返ってみてどのようなことを考えていますか。

A あの、なみさんと話をしている中で「100歳まで生きるから」って言ってたんですよ。なのに、なんていなくなっちゃったんだろうなあって。わたしたちは、なみさんにいっぱい「やさしさ」っていうものをもらったのに、わたしたちは何もしてあげられなかったなあって。せめて、もうちょっと生きていて欲しかったなって思う。

B いいおばあちゃんとかきれいな人とかは、みんな早く死んじゃうっていうじゃないですか。だから、なみさんみたいないいおばあちゃんをなんで神様は殺したのかな、なんて思ったりします。

本間 人はいつか死ぬかもしれないけど、何でって思っちゃうよね。

### (お焼香後について)

本間 今度は、みんなのお父さんお母さんとのことなのですけども、なみさんのところに行くとか帰ってきたとかは、お話はしましたか。

B はい。

A 私は話してないです。お父さんがたまたま看板を見つけて「なみさん、亡くなったってね」って言って、「ああ、お線香あげに行ってきたよ」って言いました。

本間 おとうさん、おかあさん、びっくりしていた。

A さほど、びっくりはしていません。

本間 なみさんのところに行ったりしていることは、お父さん、お母さんは知っていたのかな。

A そうですね。なみさんの話もお父さんから聞いたから。

本間 まあ、隣にいたと言っていたからね。Bさんはどうですか。家の人にお話したとき、家の人はなんて言っていた。

B 行ったり、しゃべったりしてきた時に、夕飯の時に話しているの、「なみさんが亡くなっていて今日行ってきたよ」って言った時は、「え～!!」って驚いて、「そうだったの～」って。おじいちゃん

とおばあちゃんも、なみさんのことは知っているみたいだったから。

本間 学校の仲間いるじゃないですか。友達とか。夏休み中のことだったですけども、「なみさんところに行って、お線香あげてきたよ」と言うような話はしましたか。

B はい。

本間 一緒に行ったグループ。

B それ以外にも。あの、写真撮ったんですよね。みんなで行ったときに。そのときに写真を掲示したんです。その写真を見て、「この人なみさんっていうんだよ」って。「この人死んじゃったんだ」って言ったら、「えー、そうなの!」って。「お線香あげてきた」っていたら「えー」って。なみさんは結構有名人だからね。

A みんな、かわいいねって(言っている)。

### (この体験をどうして学んだこと)

本間 最後に、今回、このような経験をしたのですけれど、別に仕事とかそういうことばかりではないのですが、このような関わり、経験は色々な意味でみんなには何らかの影響を持ったのだと思うのですね。今回のことはみんなの中にはどのように生きていくのかを知りたいので、今回のことで感じたこと、今後どのようにふるまっていきたいとか、思っていることってありますか。

B ある。今しかできないことは今やんないとなって。友達も亡くなっちゃったことがあって、なんでだろうなってすごく悲しかったんです。その時も、なんかもっと優しくしておけばよかったとか、もっと一杯しゃべりたかったなとか思ったりした。だから、今しかできないことはやったほうがいいんだなって(思っています)。

A 生きる時間は限られているから、その生きている間に、一番良かったと思えるような思い出をつくってあげたかった。(交流会の後に再度訪問した時)名前を忘れられていたんですよ。だからもう一回行って名前を覚えてもらおうって思ったんです。結局覚えてもらったかどうかはわからないですけど。

B 多分、覚えていると思うよ。私が行ったときに、必ず「Mさんは」って言われるんですよ。だから覚えていていると思う。

本間 そうですか。ありがとうございます。

みんな、一番初めのきっかけは「13歳の社会へのかけ橋づくり事業」という授業の一環で行っただけですが、そのきっかけをはるかに超えて、自発的に行ったりしていましたよね。この授業はみんなにとって大きかった。

A はい。

B おっきすぎ。

本間 今話を聞いていても、今できることは今しようとか、本当に生きる時間というのは限られているので、その中で精一杯生きることは大切だよってということは、毛利さんがしっかり教えてくれた。すごいことだね。

本間 これは大事なことなので多くの人に知ってもらいたい。毛利さんもすごく喜んでらっしゃると思いますよ。人生の最後にみんなに出会ったんですよね。ほんとに最後の最後に。毛利さんは幸せだったなって思います。みんなはこの経験をどういう風に生かすのか私には分からないけど、仕事に生かすっていうのもあるかもしれないし、感性みたいなものを大事にしようとか、友達を大事にしようとか、今の時間を大事にしようとか、色々な場面にこの経験が生かされたならば、

とても素晴らしい経験だったと思います。本当に今日はありがとうございました。

## 資料 12 福祉文化学会東北ブロック大会での発表内容

「毛利なみさんとの思い出」(発表原稿)<sup>1</sup>

A・B・C(栗原市立鶯沢中学校)

## ○ A

私たち 3 人は 1 年生のとき「13 歳の社会へのかけ橋づくり事業」で「うぐいすの里」という老人ホームへ行きました。やはり、老人とふれあうためにいくもの。何かを考えなくては いけません。そこで私たちの担当する「まんさく」のグループで何をするかを考えました。老人だから動き回るのは辛い…。でも、パフォーマンスなどをして大きい音を出したら、心臓が弱い人にはいけないことだし。動かなくてすむ、大きな音がしない楽しい



写真 12 体験を発表する中学生

ゲーム…。「あっそうだ!輪投げにしよう」ということですぐに輪投げに決まりました。「でも、せっかくふれあうのだから思い出に何かものを送りたい…。」と考え、老人なら読書が好きかな?ということで、落ち葉のしおりをプレゼントすることにしました。

## ○ C

交流会当日、まんさくグループに案内されていくと、皆さんは「水戸黄門」を見ていました。でも、一番目に入ったのは、車椅子にちょこんと座ってレンズの大きな眼鏡をかけているかわいらしいおばあちゃんでした。それが、毛利なみさんなのです。自己紹介やゲームを終え、まんさくの部屋の掃除が始まり、老人の皆さんとも少しながら話しができました。特に、なみさんとは、昔の話や息子さんの話もしてもらいました。うぐいすの里の掃除が終わり、「13歳の社会へのかけ橋づくり事業」は幕を閉じました。

## ○ B

その後も何回か個人的に交流をしていました。そして、部活動が忙しくなり、交流も一時途絶えました。そして、夏休み…クラスメイトから、部活動の後、「毛利なみって、お葬式の看板あったよ」と言われました。私たちは信じられなくて、すぐ、「うぐいすの里」へ行きました。そして、「毛利なみさんっていますか」と聞くと、「なみさんは昨日の夜…亡くなったよ…」その言葉は心の中に響き渡りました。頭が真っ白になって、何も考えられませんでした。そして、3人で相談して、「うぐいすの里」で、なみさんの自宅の住所を聞いて、お供え物のプリンとゼリーを買って、看板を探しに行きました。そうした

<sup>1</sup>栗原市民公開講座・日本福祉文化学会東北ブロック大会(2006/11/3 鶯沢振興センター)での発表原稿

ら、通学路でその看板を見つけて、3人で行くかどうか迷って…でも、「会いに行かなきゃ!」と思い、勇気を出して3人でなみさんの家へ行きました。

○ C

お宅の中では、やはりお葬式も近くて、ばたばたしていました。そして、お供えするためのプリンとゼリーを置いて、線香を上げさせてもらいました。なみさんは、静かに眠っていました。その顔は今でも忘れられません。

○ A

私たちは、この交流、出来事を通じて学んだことが沢山あります。老人は老人、子供は子供ではなく、大人から老人から子供まで素直な気持ちで友達のように付き合えるような世の中になるといいなあと思いました。

○ C

私は、うぐいすの里を通じて、毛利なみさんと出会えて、すごくよかったです。私たちは、うぐいすの里の皆さんがこんなに喜んでくれて、うぐいすの里に行ったら本当によかったなと思っています。

○ B

私は、なみさんが亡くなる前日になみさんの姿の夢を見ました。それはたぶん、なみさんが何かを伝えたかったのだと思います。

○ C

私たちはなみさんにいろんなことを学びました。

○A・B・C

なみさんはおばあちゃんだけど、今でも大切な大切な友達です。

(中学生発表後、座長から感想を求められての発言)

○ C の父

交流会といっても、時間を作って…やって…それで終わりってというような感覚で私たちもいたんですけども、これをパワーアップしてですね、お線香付けにまで行ったということはですね…なかなか出来ないことだなと、しみじみ感動しております。

今後ともですね…交流会を通じてですね…こういう感動することが、この地域にますますあることを期待しております。

(倫理的配慮)

- ・故人の実名使用については、発表の趣旨を説明し、ご家族の了解を得て使用している。
- ・発表内容は、録音テープ及び発表者の発表原稿を基に作成した。

## 資料 13 認知症サポーター養成講座参加者の感想

## (感想文から拾う中学生の声) (35名)

○認知症についての講話を聞いて、認知症の人たちを差別してはいけないと分かりました。「認知症の人」だからとかではなく、今までどおりに接してあげたりするのが、認知症の人にとって一番良いということも分かりました。地域の方との懇談もとても勉強になりました。佐藤さん、地域の皆さんありがとうございました。

○認知症という病気について最初はよく分かりませんでした。高齢者が増えていくにつれて認知症になる人も増えていくということを知って不安な気持ちになりました。認知症は、脳の細胞がゆっくり死んでいき、幻覚を見たり、妄想的になったり、自分の家を忘れたり、普段生活している中でも影響を及ぼす病気です。あまり考えられない障害が起きて怖い病気だなあと思いました。妄想により、うつ病という心の病気までになることがあるということで、認知症を治す薬があればもっと認知症になる人が減ってくると思います。この講和で学んだことを、これからの生活で生かせたら良いなあと思っています。認知症について前より知ることができて勉強になりました。

○私は佐藤さんや後藤さんたちの話を聞いて、認知症はどのようなものなのかなど、認知症の症状(中核症状と周辺症状)をうぐいすの里に行き行って学んできました。佐藤さんはビデオ等で分かりやすく認知症のことを教えてくれました。そのおかげで、「中核症状と周辺症状」のことが分かったので良かったです。後藤さんの話は、認知症になると、大変なことなどを教えてもらいました。私は今日学んだことを将来に役立つようにしたいと思います。

○私は認知症のことを詳しく知らなかったのですが、今日の講話を聞いて、認知症についていろんなことを知ることができました。この講話でわかったことは、認知症は今完全には治すことができない病気だけど、周りで支えてあげれば少しでも良くなっていくということです。佐藤さん今日はありがとうございました。

○はじめて「認知症」という言葉を講話で聞いて、始めは何なのか、さっぱり分からなくて、聞いているうちに病気なのだということが分かりました。認知症は「記憶障害」や「見当識障害」、「理解・判断力の障害」などの障害があることも知りました。それに、認知症がある人は自分が認知症なのだということが分からないそうです。私は「認知症」は凄く怖いなあと思いました。でも、接し方で余計病気が悪くなる方もいるので、相手の気持ちも考えなくてはいけないんだと思いました。講話をしてくれた佐藤さん、ありがとうございました。

○僕は「認知症」とはどのような病気なのか分かりませんでした。でも、佐藤さんの講話を聞いて、認知症はどのような病気か、どう接していいかなど知ることができました。認知症の人のビデオを見て、やさしく声を掛け、ゆっくり聞き取りやすく話すことが大切だと分かりました。佐々木護さんの福祉活動についての話を聞いて、佐々木さんが今気に掛けていることがあると言っていました。それは、お年寄りに話をかけることです。お年寄りの人は話しかけてくれる人がいるととても嬉しいと言っていました。僕はこれから通学する時にお年寄りに話をかけてみたいと思いました。

○僕にとって認知症という病気は物忘れ程度の病気だと思っていました。しかし、今回認知症の講話を聞いてそうではないことを知りました。例えば、脳の細胞が壊れてしまうと中核症状が起こり、記憶障害や見当識障害などの症状が起こってしまうのです。そして、本人がもともと持っている性格、

環境、人間関係など様々な要因が絡み合うと周辺症状が起こります。僕の家にも祖父母がいます。祖父母などの交流などを通して認知症のことを分かっけいき、普段の生活にも講話で聞いたことを生かしていきたいです。

○佐藤さんの話を聞いて認知症を改めて深く考えさせられました。前までは記憶障害や話が上手くできないだけだと思っていましたが、その考え方は全然違いました。認知症は脳がダメージを受けてしまい、それによって中核症状になって、その人の性格や素質、環境や心理状態で周辺症状が見られる場合があるということです。中核症状は治療で緩和させることができますが、周辺症状には、その人との関わり方が大切になるそうです。私は認知症を深く知らなかったけど、佐藤さんの講話を生活に活かしたいと思います。

○僕は講話を聞く前、認知症と聞くと変な人と思っていました。講話を聞いて僕は、認知症の人がどれだけ大変なのかやどんな症状があるのかがよく分かりました。認知症の人への接し方で、認知症の人が自分が怒られて何度も同じことを言われて嫌で怒ったりすることが分かりました。高齢者が多くなったら僕たちが支えていかななくてはいけないんだなあと思いました。

○私は、初めて認知症の意味を理解しました。最初は認知症とはただ聞いただけで意味などまったく知りませんでした。でも、今日の講話を聞き、認知症とは生活もすべて不自由になってしまうということを知りました。自分の年齢や日にちを忘れてたり、自分の家が分からなくなったり、認知症とは、本当に大変なものなんだと分かりました。これから私も老人の人たちに目を向け、話をたくさんしていきたいと思います。(T・A)

○最初は「認知症って物忘れとかって聞いたことがある」と思って聞いていたけれど、講話を聞いて、あらためて、どういう病気なのか分かった気がします。中核症状から周辺症状まで色々な病状がありました。とても大変な病気だということが分かりました。懇談では佐々木護さんに話をしました。佐々木さんは毎日散歩をしているのだと言います。老人の家に行って一声かけるのだそうです。家族でも祖父母に一言でも多く話しかけることがよいそうです。午後は午前にも習ったことを踏まえて交流ができれば良いなあと思います。

○私は認知症という言葉を知ったことがありませんでした。でも、実際どういうものか分からなかったけど、今日の講話を聞いて、認知症の症状や接し方などが分かりました。認知症の症状には中核症状と周辺症状があることが分かりました。どちらも日常生活に困難を与える病気ということが分かりました。地域の方の講話では、佐々木護さんが話をしてくれました。私たちが簡単だけどやっていない、お年寄りに一声かけてあげることが大切だと教えてくれました。今日の講話を忘れずにしていきたいと思います。

○講話を聞いて認知症とはどんな病気なのかや認知症の方への接し方、今後の認知症の方たちの人口など、とても分かりやすく教えていただきました。そのおかげで、今まで分からなかったことなどを知ることができて良かったです。今回の講話で分かったことがたくさんあったのでそれを生かして認知症など病気の人たちと接する時には正しい対応ができるようにしていきたいと思いました。それに、これからは福祉活動に興味を持ち、少しでも役に立てるようにしていきたいです。

○佐藤さんの講話を聞いて、改めて認知症について学びました。最初は変な人だとばかり思い冷たい目で見えていました。でも、講話を聞いて、冷たい目ではなく暖かい目で見られるようにしていきたいです。今、高齢社会が進んでいます。このまま進むと2人で1人のおじいさん、おばあさんを支えなければなりません。だから今、自分にできることをしていきたいです。認知症サポーターのオレンジリングをもらいました。今できることは今日から始めて支えていきたいです。

○佐藤さんの講話を聞くまでは、普通のお年寄りとはどこか違っている人というイメージを持っていました。でも、講話を聞いたり、ビデオを見たりしていくうちに、今まで持っていたイメージがなくなりました。認知症の人への対応の仕方も知ることができました。行き過ぎた接し方も相手を傷つけてしまうのだと聞いたので、気をつけたいです。認知症の中核症状は困っているサインだと教えてもらいました。だからこそ、周りの皆が協力して支えていかなければなりません。講話で正しいことを学べて良かったです。

○僕は認知症と聞くとこのようなイメージがありました。頭がおかしい人、気持ち悪いなど差別のようなことを思ったりしていました。しかし、今回の講話を聞いて、その考えは間違っていると気づきました。認知症の人を援助して助けなければと思いました。そして、社会福祉士さんのたくやさんの話を聞いて、自分には何ができるんだろうと思いました。僕はこれから道端で困っているおじいさんやおばあさんに優しく声をかけたいです。

○認知症の話聞いて、僕は今まで知らなかった色々なことを学びました。認知症の方への接し方、認知症とは何か、症状など色々な話を聞きました。そして認知症は誰でもなりえるということがわかり、しかもこんな大変な病気にかかる人が年々増えていることを知って驚きました。でも、認知症の方をサポートする会や介護をしてくれる施設が地域ごとにあることを聞いてうれしくなりました。認知症はこれからもっと増えてくるのもっと認知症を学びたいです。

○私は認知症のことをよく知らなかったので、どういう病気かわかりませんでした。でも、佐藤さんの講話を聞いて認知症とは脳の細胞が死んでしまうということがわかりました。病気を持っていても普通に話せると聞いて、それぞれいろんな病気があると驚きました。私は自分にできることを探して積極的に優しく接してあげるといいと講話を通じて学べたのでそれを今後生かしていきたいです。

○今日始めて知ったことは、認知症という名前のことです。以前は痴呆と言われていました。講話を聞いているうちに、少しは認知症のことが分かってきました。実際に認知症の人に話しかけられたら嫌だなあと前は思っていました。けれど、今日の講話を聞いて、どう接したらいいかなど、一人暮らしのおばあさんたちは1人でなんでもやっていることなど知りました。この講話で学べたことをこれからの生活で生かしていきたいです。

○佐藤さんの講話の中で、認知症の人を温かく見守り、支援するということを学びました。前半の講話の中では痴呆という名前の由来などを学びました。後半では地域の方々に認知症の大変さなどを学びました。これらのことを今後の生活に生かして認知症の方を支援したいです。

○私は今回の認知症の講話を聞いてとても良かったと思います。今まで認知症と聞くとあまり良いイメージを持っていませんでした。でも、今回の講話や地域の人たちの話を聞いて認知症の方もまわりの人が認知症をしっかりと理解することで変わってくるのではないかと思います。認知症の方も、認知症にかかる前は、色々なことを生きていた私たちと同じ人なので、相手のことを考えながら接していきたいです。認知症というのは病気、なりたくてなるのではないのです。そんなことも考えどんな人にも手をさしのべられる人になりたいです。

○私は佐藤さんの講話を聞いて、多くの高齢者が認知症になっていることを知りました。私は最初認知症とはなんだろうと思いました。佐藤さんの講話を聞いて、認知症とは時間や場所、自分がどこにいるかわからなかったりと、脳の病気だということがわかりました。私はこれから近所で認知症のような人を見かけたら、自分のことじゃないからと無視しないで何かお手伝いすることはありますかと一声かけてみようと思います。

○初めて認知症という病気を知り、僕はどんなことが起こるかわかりませんでした。でも、今日の話

を聞いてどんなことが起こるかが2つ分かりました。ひとつは中核症状について、ふたつ目は周辺症状についてです。これからこういう人にあったら親切に教えたいと思いました。本当にありがとうございました。

○僕は講話を聞く前までは、道とかスーパーでうろちょろしているお年寄りの人を見て、何やっていたらと思うました。でも、講話を聞いてからは、道とか何か困っているのを見つけたら優しく声をかけてあげようと思いました。伊藤藤穂さんの話を聞いて思ったことは、認知症の方はなりたくなかったんじゃないし、なってしまった人は、一生懸命やっているんだと思いました。なにかしらでそういう人にあったら声を優しくかけたいです。

○僕は初めて認知症という名前と、どういうものかということを知りました。最初はちょっとした物忘れかと思っていました。しかし、話を聞いているとついさっきやったことを忘れるなどの症状があると聞いて驚きました。まさか、ついさっきのことを忘れるなんてと思いました。認知症にはその他にも家が見えなくなるなどの症状があります。認知症の方は周りの人たちが助けてあげなくてははいけません。しかし、若者が少なくなっている中、どう相手にすればよいのかこの先問題になってきそうです。ひとつひとつ解決していけば良い世の中になって行きそうです。

○認知症はどのようなものかなど、いろいろ分かったし、認知症の方との接し方など詳しく簡単に話していたので凄く分かりやすかったです。講話の最後に認知症のビデオを見て、街などで認知症の方を見つけたら助けたいなと思いました。講話の次に会議室で伊藤さんと懇談をして伊藤さんの大変さが分かりました。伊藤さんは栗駒の老人ホームにいるということでした。佐藤さん、伊藤さんありがとうございました。

○私は認知症のことはあまり知らなかったので良い勉強になりました。講話をしてくれた佐藤さん、どうもありがとうございました。あと、後半は地域の人に認知症のことを教えてもらいました。「お年寄りの人たちはその一言がうれしくてそれを生きがいにする」と言っていました。なので「その嬉しいことを増やしていきたいなあ」と思いました。最後に講話をしてくれた佐藤さんありがとうございました。これからも、お年寄りの人たちとの交流を大事にしていきたいです。

○僕は認知症がどんなものかを知りました。認知症の講話を聞いてなんだか老人になりたくないなあと思いました。老人は色々な病気にかかるんだと思いました。認知症にかかるとう記憶や理解ができないと思いました。僕のおばあちゃんも時々忘れてたり、名前を間違えたりします。やっぱり普通に生活していても忘れてりするのが分かりました。老人はどれだけ大変なのかを知りました。老人に声をかけられたら、今日教えてくれたことを使って老人と話ができれば良いと思いました。これから老人を大切に大切にしていきたいと思いました。

○僕は認知症という病気についてあまり知りませんでした。でも、今日認知症には2つの種類があること、その中でも症状がたくさんあって、普通誰でもなってしまう「物忘れ」などと勘違いしてしまうことなどのことが分かりました。でも認知症は10年ぐらかけて末期までになっていきます。だから早い時期に受診することで進行を遅らせることができるのならそういうことを積極的にやるべきだと感じました。そういうことだけではなく、他の場面で周りの方々にも協力を得ることで少しでも安心して出かけたりできる地域づくりも大切だと思います。

○私は認知症の話聞くまで認知症と聞いてあまりいいイメージを持っていませんでした。しかし、福祉関係の人たちの話を聞いてみたら認知症について別のイメージが持てました。あと、認知症の方はなにをやるのも一生懸命だそうです。ズボンを手に通していたり、ボタンがひとつずれていたり、でも認知症の方は一生懸命やったこと。そう教えてくれました。その認知症になった方をサポートし

てあげるのは私たちの役目なので、それを今後の生活に生かしていきたいです。

○「認知症」のことはテレビのニュースなどでは聞くことがありましたが、身近にそういう人もいないし、難しいものだと思っていたので、あまり関心を持ってませんでした。自分にはあまり関係ないと思っていたからです。しかし、今日の講話を聞いて、認知症は誰でもなる可能性があるということが分かりました。自分の身近にいる人にも可能性があるということです。そんな時は難しく考えずに、「サイン」に気付いていけば良いと思います。サインに気付いて、それにしっかり答えていくことが大切だと思いました。

○講話を聞く前は「認知症」のことをあまり知らなくて、老人の事情も何も知らなかった私でしたが、今日の講話を聞き、今までの自分の老人に対する態度はどうだっただろうと考えるようになりました。「認知症」というのは、自分の記憶の一部が消えてしまったり、自分のいる場所を忘れてしまったりと、よく相手の行動を見なければ「認知症」と分かりません。なので、周りの地域の人で支えあっていくのが大切だと気付きました。少しでも老人を支えられるようになりたいと思います。

○認知症には中核症状と周辺症状があるということが分かりました。まず、中核症状では、記憶障害や見当識障害など、私たちには考えられないことばかりでした。もし、そういった症状の人と会ったら、決して嫌がらずやさしく接してあげたいと思います。認知症はどんな病気なのかやどんなふうに対応すれば良いのかなど、初めて知ったことがたくさんありました。今日知ったことをこれからの生活に生かしていきたいです。

○佐藤さんは初めに自己紹介をしたのですが、福祉に関する資格の欄で三つも資格を取っていました。もちろん、三つほどなくてはこのような地位にはつけないと思いましたが、福祉に対する思いがとてもある方なんだなあと思いました。佐藤さんは「認知症になった人」よりも「認知症の方を見ている方」のことを特に話していらっしゃいました。それは私に積極的にお年寄りにかけよって、いい思いにさせてあげよう、という気持ちを持って欲しいからだだと思います。今日学んだことを活かして、お年寄りの接し方に気をつけて生きたいと思います。とても勉強になりました。

○認知症とは、上手く動かなければ精神活動も身体活動もスムーズに運ばなくなる病気です。これからは、お年寄りを大切にしたいです。もし困っている人がいたら助けてあげたいです。困っている人がいたらまず、「大丈夫ですか」と言えるような人間になりたいです。そうなるようになるにはまず、努力が必要だと思います。私は人に信じられるような人になりたいです。日々努力をしたいです。

### （体験談・意見交換の講師として参加した地域住民の評価）

#### ①S 自治会長

中学生は福祉というものは何かやらなくてはいけない（荷物を持ったり、席を譲ったりなど）ものだと認識している。普段、みんなが当たり前のようにやっていること、道であつたお年寄りに一声かける、それだけでも福祉なんだということをGWでは話した。それぞれの立場でできる範囲で認知症の方と関わっていくことが継続につながると思う。

#### ②G 民生児童委員

GWの中で中学生から「どうすれば認知症にならないのか」という質問を受けた。残念ながら完全に認知症を予防することはできないが、近所同士のお茶のみ、仲間同士での趣味や活動等、脳を楽しく使うことが認知症の予防になるとの話をした。その為には今回のように、世代に関係なく住民の認知症に対する理解と知識が必要であり、地域の中での交流や支えが必要だと思う。

③栗原市(旧鶯沢町)C 保健師

栗原市では今回のように、栗原市のメイトが中学生を対象としたサポーターの養成講座は初めてだと思う。そんな貴重な時間を私が引き受けて良かったのかなと思っていましたが、お年寄りや認知症の方への中学生がいただくイメージや思いなど、聞くことができ、大変良かったです。実は、私の母親も認知症なのですが、自宅に帰ってから娘から、「佐藤さんや地域の方の話を聞きながら、おばあちゃんの様子を思い出した」と話してくれました。うぐいすの里の皆さんが、地域の方とともに活動されている様子は、いつもすごいな、ありがたいという気持ちでいっぱいです。今後とも、よろしく願いいたします。

④栗駒・鶯沢包括(E 主任ケマネ)

栗駒では核家族化がずいぶん進んでいるが、鶯沢の中学生の皆は祖父母と暮らしているという方が多かった。そういう地域を大切にしていかなければと感じた。うぐいすの里でのこういう取り組みが地域全体に波及していければと感じた。中学生からも、認知症の症状=困っているサインだと思い、力になりたいと多く聞かれ良かった。

## 資料 14 事業提案型組織新設・事業実施制度に提案された企画書

共生型グループホーム「ながさか」の原型である事業提案型組織新設・事業実施制度で提案された事業内容は、以下のようなものである。ここでは、事業費など企画書の一部を簡素化して表記する。

### 企 画 書

#### 1 事業名『重度な障害児者が地域で生活できるグループホームを作ります』

重症心身障害児者が地域と関わりながら生活できる場として、グループホームを作り、地域の協力を得ながら、笑顔あふれる生活を送れるように支援する。

#### 2 事業目的

これまで、重度・重複障害児者は、サポートシステムが脆弱であることや、ケア基盤等の社会資源が不足している等の理由により、住み慣れた地域で暮らし続けることが難しくなったり、施設利用者が地域生活への移行から取り残され、病院や施設等の限られた場所ではしか暮らせない状況がある。そこで、重度・重複障害児者が高齢者や中軽度知的障害者等と共に、地域の方々との関わりの中で、いきがいや役割をもって豊かに過ごす、共生型グループホームという新たな生活の場（「我が家」）を創り、誰もが地域で安全に暮らせる地域生活支援システムの構築を図る。

#### 3 グループホームの概要

##### ①施設規模

- ・入所者：重度障害児者、中軽度障害児者及び高齢者の計 10 名。
- ・建物：既存の建物をバリアフリー化等の改修工事をして使用。
- ・スタッフ：看護師資格を持つ職員 2 名と世話人 6 名が 24 時間体制で対応。

##### ②地域との関わり

- ・地域の人たちが自由に出入りできるオープンスペースを設ける。
- ・オープンスペースは、高齢者や障害者のデイケア的な役割を兼ねる。
- ・ボランティアも集える空間にする。
- ・これによって、グループホームの利用者も様々な人と触れ合うことができ、地域を意識しながら生活できる。

##### ③医療機関との連携

- ・通常時の健康管理などは看護師資格を持つ職員が行い、必要に応じてかかりつけ医やリハビリテーション科を持った地域の中核的病院などと連携を取る。また、訪問看護ステーションの活用も考える。
- ・緊急時は、地域の中核病院との連携を取りながら適切に対応する。

#### 4 プロジェクトのポイント

①重度の障害者が地域で暮らすことができる。

これまでは、病院か施設でしか暮らせなかった障害者が地域の中で地域と関わりを持ちながら暮らすことができるようになる。

②地域社会と関わり合いながら生活することができる。

グループホームには地域の様々な人が訪れ、色々な人たちと触れ合いながら生活することにより、より「日常」に近い環境で生活できる。また、様々な人たちが集まることにより、地域コミュニティーの拠点となり、地域の活性化を図ることができる。

③入所者同士の支え合いが生まれる。

入所者の障害程度は様々で、程度の重い人のお世話を軽い人が行ったり、高齢の人の話し相手になったり、お互いの支え合いが生まれる。グループホーム内部もひとつのコミュニティーとなる。

#### 5 プロジェクトの目指す将来像と3年後の成果

この事業を実施しモデル期間の3年経過後に一般事業化することによって、次のような成果が生まれる。

①病院から重症心身障害児施設等に入所という限られた可能性が、病院から施設そして地域へという流れが生まれ、重症心身障害児施設等が地域生活への移行のための通過施設になる。

②重度の障害児者が、高齢者等と他の入所者や地域の方々と関わりながら、当たり前で暮らせるようになる。

③地域の人たちといつでも自由に交流することによって地域が元気になる。

## 資料 15-16 厚生労働省老健局, 社会・援護局等への事業提案及び資料提供

## 資料Ⅰ 共生型 GH「ながさか」の生活の様子

ながさかでは、年齢、障害（生活のしづらさ）の種別、程度も違う12名が、一つ屋根の下で暮らしています。一日の生活の様子を概観すると次のようになります。

## 【 朝 】

- 朝は、各自思い思いの時間に起床します。そして、誰に指示されるということもなく配膳等朝食の準備を手伝い、概ね7時30分頃から朝食が始まります。
- 知的障害のあるW・Hさん、I・Kさん、M・Sさんは、8時過ぎに仕事へ出かけます。重症心身障害者のM・Kさんは、10時頃に施設からの送迎車を利用して、知的障害者通所更生施設「とも」に通園します（重症心身障害児（者）通園事業B型）。
- お年寄り（以下「認知症高齢者」という）は、障害のある方々（以下「知的障害者」という）が出かける際に「いってらっしゃい」「今日も頑張っておいで」等と声をかけながら送り出しています。知的障害者は、見送りや出迎えの言葉がとても嬉しいと語っています。
- M・Kさん（重症心身障害者）への支援は、起床、洗面、排泄、食事介助等全面介助（支援量は、2005「宮城県共生型GH生活環境等研究事業報告書」55頁参照）。
- W・Hさん他2名（知的障害者）への支援は、見守り及び誘導。

## 【日 中】

- M・Kさんは、アテトーゼ型脳性麻痺（四肢麻痺）で、日常生活の全般に介助が必要です。「とも」での日中活動は、健康維持、体力の増進を図るとともに、創作活動、リハビリテーション活動などを中心に行っています。土・日を除き毎日通います。
- W・Hさんは、「ながさか」の前に在籍していた知的障害者入所更生施設にいた頃から続けている職場実習（食品加工会社でのたまねぎの皮むき作業）で、月曜日から金曜日までの終日を過ごします。月平均で1万円程度の賃金を得ています。
- I・Kさん、M・Sさんは、「ながさか」の前に在籍していた知的障害者入所授産施設、知的障害者入所更生施設で行っていた作業（ミシン針の検品作業やカレンダー作り等の創作作業）のお手伝いで月曜日から金曜日までの終日を過ごします。
- 認知症高齢者は、茶の間や縁側、自室などで思い思いの時間を過ごしています。また、女性は、掃除や洗濯、食事の準備等の家事全般が日課となっています。「家を守るお母さん」的役割を獲得し「若い人たちが帰ってくる前に、〇〇をしておきましょう」といった声も良く聞かれています。男性の中には、庭掃除を得意とする方がおり、家の周りの掃除を担ってくれています。認知症高齢者は、地元の方々を優先して受け入れていることから、地域との関わりやこれまでの暮らしが継続し、昔からお付き合いのあったお友達が訪ねて来たりして、ちょっとした井戸端会議が始まります。
- M・Kさん（重症心身障害者）への支援は、施設との情報共有や日程調整。
- W・Hさん他2名（知的障害者）への支援は、職場や施設との情報共有や帰宅時間の確認、日程調整等。

## 【夕方】

- 仕事や通園事業に参加していた知的障害者等は「ただいま」の挨拶をしながら帰宅します。茶の間で待っていた認知症高齢者が「おかえりなさい。疲れたでしょ」等とねぎらいの言葉で迎えます。
- 知的障害者は、お弁当を台所に出しながら、今日一日の出来事を楽しそうに、時には愚痴りながら認知症高齢者や職員にお話をしています。話を聞いてくれる人が待っているというのは、とても嬉しいようです。お話を聞いてくれる、お話をしてくれる、このような関わりが、日常生活を通じて当たり前のように繰り返されています。
- 知的障害者が帰宅して着替えを済ませるとほどなく、夕食の準備になります。
- 知的障害者、重症心身障害者及び認知症高齢者が、それぞれの役割を持ち職員と一緒に準備を始めます。朝食時と比べると比較的時間に余裕があることから各自が何らかの役割を持って参加しています(宮城県共生型GH生活環境等研究事業報告書 17 頁)。
- M・Kさん(重症心身障害者)も、台所にエプロンをつけて入り、車椅子からあれこれと指示を出しながら調理に参加しています。
- 夕食は、誰が決めたということもなく「みんな揃って」が習慣になり、利用者全員で食卓を囲んでいます。
- 食事中、おかずをこぼしてしまう認知症高齢者をお世話する知的障害者や、好き嫌いを言って食べ残す知的障害者を叱ってくれる認知症高齢者もいます。
- 知的障害者は、「ろうるさいおばあちゃん」を当たり前のように受け入れているようです。
- M・K(重症心身障害者)への支援は、役割の場づくり及び排泄、食事介助等全面介助(支援量は、2005「宮城県共生型GH生活環境等研究事業報告書」55 頁参照)。
- W・H 他2名(知的障害者)への支援は、見守り、誘導及び他者との調整並びに精神的安定に向けた関わり

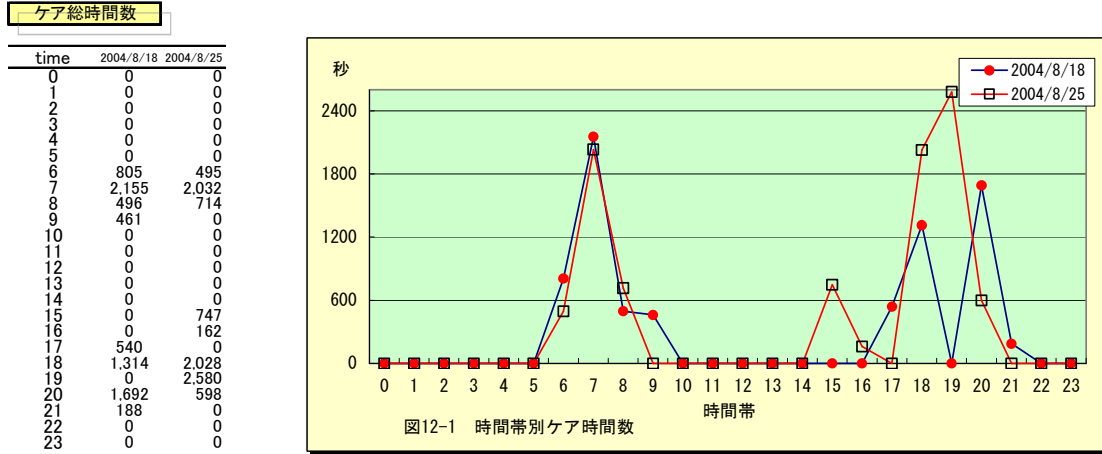
## 【夜】

- 夕食後はお風呂です。「ながさか」には、介助を必要とする方ものんびりを入れる広めのお風呂と一般家庭用個浴の二つのお風呂があります。
- 認知症高齢者と知的障害者が一緒にお風呂に入ることがあります(宮城県共生型GH生活環境等研究事業報告書 19 頁)。お風呂嫌いの認知症高齢者が、知的障害者の方からの誘いにすんなり応じてお風呂に入るといったこともたびたび見られます。
- お風呂の後は、各自の生活リズムで過ごし、居間で過ごしたり、自室に戻ってテレビを見たり、音楽を聴いたりした後就寝しています。
- M・K(重症心身障害者)への支援は、入浴・排泄介助、就寝準備等(支援量は 2005「宮城県共生型GH生活環境等研究事業報告書」55 頁参照)。
- W・H 他2名(知的障害者)への支援は、見守り及び誘導

「ながさか」には、支援者がつくった「日課」のようなスケジュールはありません。各自が、生活の中で獲得した、役割としての日課を持って暮らしています。他者との関わりの中で生活のメリハリが築かれ、自律的な暮らしの営みを作り上げているように感じます。これらのことが、生活リズムの安定につながり、障害による生活のしづらさの軽減に良好な影響を与えているものと考えています。

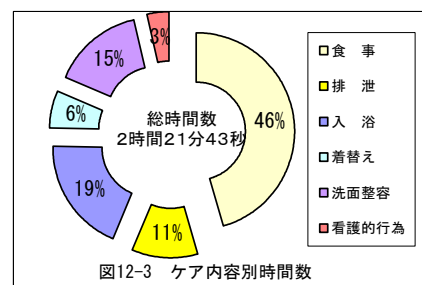
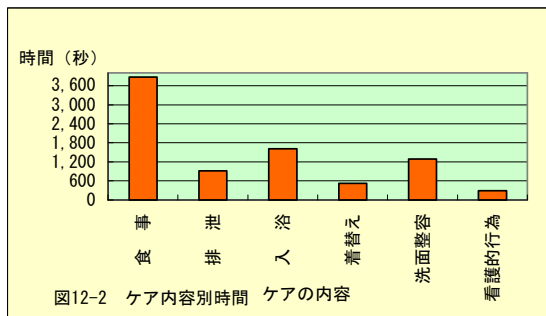
資料2 重度重複障害者に必要な居宅介護支援量

図7 A(重度・重複障害者)に必要な居宅介護支援費積算基礎  
(ケア内容・時間帯別身体介護提供時間数)



総時間数	7,651	9,356	平均
	(1時間7分31秒)	(2時間35分56秒)	8,503.5
			2時間21分43秒

time	1-食事		2-排泄		3-入浴		4-着替え		5-洗面・歯磨き・整容		6-与薬・バイタル		計(秒)	
	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)
0													0	0
1													0	0
2													0	0
3													0	0
4													0	0
5													0	0
6			252	151			553						805	151
7	1,608	1,553		30			344		349	342	198	107	2,155	2,376
8				375					496	339			496	714
9			321				140						461	0
10													0	0
11													0	0
12													0	0
13													0	0
14													0	0
15		747											0	747
16				162									0	162
17	540												540	0
18	1,077	1,793	186								51	235	1,314	2,028
19		182		203		1,293	1,923				272		0	2,580
20	252		147								188		1,692	598
21													188	0
22													0	0
23													0	0
計(秒)	3,477	4,275	906	921	1,293	1,923	693	344	1,033	1,551	249	342	7,651	9,356
計(分・秒)	57分57秒	1時間1分15秒	15分6秒	15分15秒	21分33秒	32分3秒	11分33秒	5分44秒	17分13秒	25分52秒	4分9秒	5分42秒	2時間7分31秒	2時間35分56秒
行為内容	食事(1)	食事(2)	排泄(1)	排泄(2)	入浴(1)	入浴(2)	着替え(1)	着替え(2)	洗面等(1)	洗面等(2)	看護的行為①	看護的行為②		
総時間数(秒)	3477	4275	906	921	1293	1923	693	344	1033	1551	249	342		
行為内容	食事	排泄	入浴	着替え	洗面整容	看護的行為								
ケア時間	3,876	914	1,608	519	1,292	296								



調査結果の概要

Aさんが必要とする居宅介護支援(ホームヘルプサービス)は、総時間数が2時間22分程度、身体介護の内容は、食事介助がほぼ半数を占め、次に入浴介助が続く。いわゆる三大介護で76%を占めている。

### 資料3 現時点での知見

共生型グループホーム「ながさか」での生活の様子の観察や入居前後の比較から以下の内容が示唆されました。

#### (共に暮らす状況から読み取れたこと)

##### ①世代間の交流がある

・お年寄り、朝、障害のある方を送り出し、夕方迎えるという、家庭内での「父母」や「祖父母」の役割を得ている。障害のある方は、毎日、同じ人が送り出し迎えてくれるという「安心感」やその日の出来事を「聞いてくれる」喜びを得ている。

##### ②居間で過ごすことが多い

・居間に集まる時間が多くなっている。  
・これは、家庭での「茶の間」と何ら変わらない機能を果たしていることにより、自然と「家庭的な雰囲気」ができあがっていることによる。

##### ③お互いをどのように思っているのか

・お年寄りは障害のある方を、「障害のある人」という見方はせずに「〇〇さん」「若い人」と呼んでいる。障害のある方はお年寄りを、「認知症のある人」という見方はせずに「おばあちゃん」「〇〇さん」と呼んでいる。  
・ただ、廊下を繰り返し歩いたりする方がいるため、認知症（痴呆症）高齢者を「目の離せない人」という認識をもっている。

##### ④障害や認知症（痴呆）を理由としたトラブルは見られていない

・日常生活上の些細ないさかいは見られるが、障害者であること、認知症の高齢者であることを主因としたトラブルは、これまでのところ見られていない。

##### ⑤重度の知的障害者に対する有効性

・現行の知的障害者グループホームと比較して、職員やお年寄りが24時間建物内にいることから得られる「安心感」によって、地域での生活が可能となる。（24時間の見守りが可能となった。）

##### ⑥お互いの存在が生活の張り合いになっている

・スタッフも含めて、年代の違う人たちが共に暮らすことで、互いの存在を意識し、それを張り合いとして生活している。

#### (支援内容から読み取れたこと)

##### ①知的障害者支援

・なじみの関わりや職員が常時そばにいる環境は、他者を理解することや職員の注目を得ることに多くの時間と関心を割くことから解放している。この為、社会関係の調整に傾注する労力に余裕が生まれ、生活行為を介して他者のお世話をし、お世話する責任感を持つ、自発的に気づいて手伝いをする等の行為を賦活化させている。  
・家庭的な雰囲気の中で安定した関わりを持つことで形成される親密性 (intimacy) は、精神的な安定感を育み、他者との関わりによって生じる感情のすれ違いに対する自分自身の行動の調整や衝動のコントロールを比較的短い時間に行えるようにしている。  
・他者との関わりを評価項目とした社会的スキルは、全面的又は長期的な支援から限定的又は一時的な支援に向上している事例が、程度の差はあるものの全員に見られた。  
・個々人が管理する時間や生活空間を得て、自分のことは自分でするという個人的な関心に相

応じた行動や必要な時に助けを求める自律性を持った行動を取れるようになった。しかしこれは、知的レベルの高い者にしか観測されていない。

- ・興味関心のある趣味活動に単独で参加できるようになり、余暇への関心を持つようになった。しかしこれは、知的レベルの高い者にしか観測されていない。他の者は、今、手にしている状況下での楽しみにとどまっている。

## ②認知症高齢者介護

- ・相手のいる生活行為は、役割意識や手続き記憶を効果的に刺激する。
- ・穏やかでゆっくりした時間と少々にぎやかな時間の組合せが、生活のリズムをつくりだしている。
- ・介護（支援）職員以外との関わりが、日常生活行為の中で展開し、暮らしに関わる適度の緊張関係が、自律的行為を促し、単調な暮らしに変化を起こしている。
- ・認知症高齢者は、重症心身障害者を「病気の子ども」と認識し、何かと気遣い世話をやいたり、知的障害者の職場での出来事の聞き役になるなど、他者との関わりによる役割獲得が効果的に行われている。

## ③共生型の暮らし

- ・異年齢の関わりは、能力（障害）の違いを役割関係に変換する。
- ・入居者の居場所は、その時々々の生活行為を伴って、居室（個人的空間）、居間（準個人的空間）、台所等が選択され、個々人の生活リズムを形成している。
- ・認知症高齢者の存在は、知的障害者の拮抗した関係の中で緩衝役割を持ち、知的障害者間の緊張関係が和らぐ。
- ・職員に対しての関わり方の特徴的傾向は、認知症高齢者は「依存」、知的障害者は「独占」と表現できる。
- ・高齢者のいる所に知的障害者が寄っていくという形で、共に過ごす場及び時間が形成されることが多い。

## ④運営等

- ・運営費上の問題は、認知症高齢者と知的障害者の組合せであれば、現行制度下でも大きなウエイトを占めることにはならない。
- ・重症心身障害者等重介護を必要とする利用者が加わると、現行の支援費制度下では困難である。
- ・知的障害者の住まいは、対象者の高齢化傾向及び長く住み続ける視点に立った場合、既存家屋をそのまま使うことは難しく、バリアフリー化の改修工事が必要である。

#### 資料4 施策への反映(政策提案等)

共生型グループホームが新たな選択肢として一般化されるためには、以下の視点に立った取り組みが必要です。

##### ①利用者について

- ・生活行為を介した他者との関わりは、役割意識や残存能力を刺激して自律的な振る舞いの表出を促し、認知症状の安定緩和につながる。
- ・共生型グループホームは知的障害者の地域移行対象者を拡大できる。(中軽度→重度まで)
- ・知的障害者の組合せは、障害程度よりも「相性」が重要である。
- ・知的障害者は、自宅から直接ではなく、何らかの共同生活体験(訓練)を経てから共生型グループホームを利用することが望ましい。

##### ②職員研修について

- ・介護(支援)職員の基本的介護(支援)能力は、認知症高齢者については周辺症状に関する基本的知識、知的障害者に関しては距離の置き方、重症心身障害者については看護知識。これを同時に発揮する能力を養成する必要がある。
- ・従来の身体介護を中心とした研修から生活のしづらさを支援する視点に立った研修に転換する必要がある。
- ・日常生活のなかで、できることに着目した支援能力の養成が必要である。

##### ③運営について

- ・認知症高齢者と知的障害者を構成員とする共生型グループホームは、現行制度の組合せである程度の運営は可能である。しかし、重症心身障害者を利用者を含めるためには、介護部分を評価した新たな支給区分や重度介護加算等の支援費制度上の工夫が必要である。
- ・共生型グループホームでは、異なる制度下の指定要件を緩和し、利用定員や設備などの重複を効果的・効率的に運用できるようにする必要がある。
- ・看護・医療及び重度介護サービスのアウトソーシング化を図り、グループホーム内に専門職を抱え込まないようにして運営の効率化を図る必要がある。

##### ④施設設備について

- ・知的障害者の住まいは、高齢化傾向及び長く住み続けるために、高齢者に準じた同様のハードが必要である。またこれは、社会資源の共有化に通じる。
- ・認知症高齢者と知的障害者の生活リズムや余暇時間の過ごし方が異なるため、居室(個人的空間)はゆるやかに区分することが必要である。
- ・立地場所は、日中活動への利便性や日常の暮らしの中で他者との関わりを持てる場所であることが必要である。

資料 17 AとBの生活史と公的サービスの利用状況

表38 AとBの生活史と行程サービスの利用状況

年	年齢	主な出来事	
		A	B
1968(昭和43)年	0	7月 出生	5月 出生
1969(昭和44)年	1		
1970(昭和45)年	2		
1971(昭和46)年	3		
1972(昭和47)年	4		
1973(昭和48)年	5		
1974(昭和49)年	6	4月 心身障害児通園支援事業施設「M学園」通園開始(2回/週)	5月 満6歳(学齢時)
		7月 満6歳(学齢時) 11月 身体障害者手帳交付(1種2級)	公的サービス利用実績無し(学齢時から養護学校小学部3年入学迄≒約3年間)
1975(昭和50)年	7	4月 就学猶予	4月 就学猶予 8月 療育手帳交付(A判定)
1976(昭和51)年	8	4月 就学猶予	4月 就学猶予
1977(昭和52)年	9	4月 養護学校入学(小学部3年)	4月 養護学校入学(小学部3年)
1978(昭和53)年	10		
1979(昭和54)年	11		
1980(昭和55)年	12		心臓手術(心室中隔欠損症)
1981(昭和56)年	13	4月 養護学校中学部入学	4月 養護学校中学部入学
1982(昭和57)年	14		
1983(昭和58)年	15		
1984(昭和59)年	16	3月 養護学校中学部卒業	3月 養護学校中学部卒業(以降在宅生活)
		4月 養護学校高等部入学	
		12月 身体障害者手帳再交付(1種1級)	
1985(昭和60)年	17		
1986(昭和61)年	18		
1987(昭和62)年	19	3月 養護学校高等部卒業(以降在宅生活)	公的サービス利用実績無し(養護学校中学部卒業から20歳迄≒4年間)
		4月 心身障害者通所授産施設「M園」通園開始	
		4月 ホームヘルプサービス(帰宅後1時間程度)	
		S大学ボランティア(水・土の13時~17時)	
1988(昭和63)年	20	7月 障害基礎年金(1級)受給開始	5月 障害基礎年金(1級)受給開始 ホームヘルプサービス利用(1回/週)
1989(平成元)年	21		
1990(平成2)年	22		
1991(平成3)年	23		
1992(平成4)年	24		
1993(平成5)年	25		
1994(平成6)年	26		
1995(平成7)年	27		
1996(平成8)年	28		
1997(平成9)年	29		公的サービス利用実績無し(ヘルパー利用停止から通所施設利用迄≒11年間)
1998(平成10)年	30		
1999(平成11)年	31		
2000(平成12)年	32		
2001(平成13)年	33		
2002(平成14)年	34	4月 知的障害者通所更生施設「T」利用開始	
2003(平成15)年	35		7月 知的障害者通所更生施設「T」利用開始 Aさんと再会(19年ぶり)
2004(平成16)年	36	1月 共生型GHFNJ利用開始	
2005(平成17)年	37		
2006(平成18)年	38		
2007(平成19)年	39	1月 療育手帳判定(A判定) 次回は平成24年7月	5月 療育手帳最終判定(A判定)
2008(平成20)年	40		